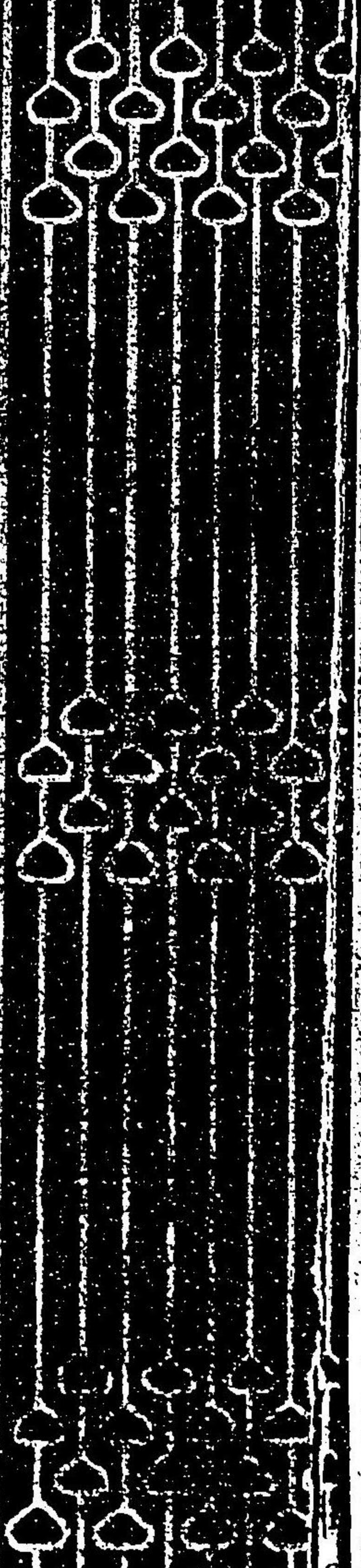


二七五子物語

二七五



32-430



ラセラ
ス王子物語

博士
ジョンソン原著
坂本大風譯編



東京
内外出版協會



Samuel Johnson, L.L.C.

緒言

本書は博士サミュエル・ジョンソンの名著『アビシニアの王子ラセラスの傳』(The History of Rasselas, Prince of Abyssinia.)の大意を兒童の爲め平易に抄譯したるものなり。

原著者ジョンソンは、一七〇九年九月十八日英國リッチフィールドに生れ、一七八四年十二月十三日ロンドンに歿す。一小書肆の子なり。牛津大學に入りて令名ありしも、學資裕かならざりし爲に、業半にして退學し、教師又は著述に従事す。一七五五年『英國大辭書』二卷を著す迄、久しく困厄と苦闘したりしが、爾後文名漸く高く、牛津大學よりはマスター・オヴ・アーツの學位を得、次て一七六二年より英國皇室の年金三百鎊を受くることとなり。茲に於て彼は生活稍や安きを得、文學俱樂部を設立して知名の文士を

集め、政教文藝を初めとして諸般の問題を拉へ、縦横に論談したりき。當時博士に對する世の欽仰其の極に達し、彼が半言隻句も争うて新聞紙の掲載する所となり、時代人心の指南車と做されき。斯く彼が社會的に重を爲したる所以は、常に其の文彩語調の特絶なるが故にあらず、寔に謹嚴高潔の人格、豪放の奥に至誠真情の動くものありたればなり。

『ラセラス傳』は一七五九年彼が未だ皇室の年金を受くるに至らざりし時に成れり。一小著述と雖、幾分彼が人格を反映する所無からず。特にそが母の送葬費を得んが爲に書かれたるに至つては、永く文界の美譚とするに足る。

『ラセラス傳』はツッケルマンが『英國散文小説史』(Hist. of English Prose Fict., by Tuckerman. P. 234)に言へる如く「幸福を將來に豫期するの徒勞と、未來の空望に現在の利得を犠牲とするの暗愚とを説かんとせるもの」に従て現在を尊重するに過ぎて、未來を想望する一切の努力を否定し、厭世的世界觀

を語る所尠からず。斯の如きは彼れ一家の哲學として又別種の趣なきにあらずと雖、徒らに少年少女を賊はんことを恐れ、多少の鹽梅を其の間に加へたる所なきに非ず。慈母に孝なりし泉下の博士は、又日東兒童の爲に、敢て余の罪を問はざるべし。

尙ほ結婚論文藝論等少年に至要ならざるものは、之を省略したれども、地理歴史上の事、例へば都會の狀況、堂塔の構造の如きは、事實を調査して却て之を補述し、つとめて兒童に現實の感を與へんことを期したり。

明治四十二年九月十八日ジョンソン博士第二百回の誕辰を迎へつゝ

大風樓主人識

目次

上篇	社會研究の望	一
一	山谷の宮殿	一
二	ラセラス王子極樂の谷を好まず	五
三	逃亡の企	一〇
四	空中飛行器	一四
五	學者イムラクの遊歴談(其の出發)	一七
六	同(印度、ヘルシヤ、アラビアの話)	二一
七	同(シリア、エサプトの話)	二五
八	抜け穴	二九
九	逃亡	三三

下篇 カイロ府留學……………三七

目次

一 留學の初期……………三七

二 愉快な青年の研究……………四一

三 賢人の研究……………四二

四 隠者の研究……………四六

五 帝王と下民との研究……………五二

六 金字塔の研究——腰元ペクアの變事……………五六

七 ペクアの行方……………六一

八 ペクアの物語……………六七

九 天文学者の研究……………七三

十 老人と死との研究……………八〇

(2)

目次

十一 歸國……………八四

附録 ラセラス傳に就いて……………八八

一 ラセラス傳を著した文學者……………八九

二 今のアビシニヤ國……………九一

(3)

ラセラ王子物語

上篇 社會研究の望

一 山谷の宮殿

世の人、明日ありと思ふこと勿れ。明日を空頼みして、今日の尊きことを知らぬものは、此の上もなき愚者の幼時の望は必ず老後に成るとは定まらず。今日の不足が明日は満足されるなどと夢を見るは大間違ひである。此んな空望を持つと、望の叶はぬ時は、力を落して元氣のない者になる。アビシニヤの王子ラセラスの一生は如何であつたらう。

ラセラスは、河の大王と云はるゝナイルの流が發して來る、アビシニヤ國の王様の第四の王子である。古來の例に従ひ、他の諸王子、諸王女と共に、奥深き宮殿の中に置かれて、外に出ることも許されず、世の波風を知る事も出來ず、安閑と遊び暮して、即位の時を待つて居た。これは昔の王様が諸王子王女に對して定めた規則であつた。

其の宮殿は彼のアマハラ山中の廣い谷に在る。此の山中は前にも記した通り、高山峻峯、輪の如くに四方を圍み、自ら一つの仙郷を作して居る。山の外から中に入るの道は、唯岩の下を通つて居る一つの洞穴が有るばかり、而も其の洞穴は人の力で造つたものか、自然の工に成つたものか、誰も知つた人が無かつた。穴の外側の口は森の繁みに隠れて居る。内側の谷に向つた口は、大昔の鍛冶の手に成つた鐵門、頗るいかめしい。其の扇が餘り重く大きな爲め、人は機械を用ひなければ、開ける事も出來ない。

さて谷の中を眺めると、四方の山山から、いさゝ小川がさらりと轉び落ち、谷を肥し、緑を養ひ、中央に集つて一つの湖水となる。あらゆる魚類は其の中に遊び、あらゆる鳥類は來つて其の翼を浸して行く。其の湖の水溢れて、又一つの流となり、暗き谷に注ぎ込んで、物凄き響を揚げつゝ、崖より崖へと、遙に下り去る。

山にも岡にも樹木茂り、小川の堤に花咲亂れ、風來れば、岩の上より香氣落ち、月改まれば果實地上に降る。畜類は草や嫩芽を食ひて、楽しく徘徊すれども、來つて捕へる猛獸も無い。牧場に草食羊の群、芝生に踊る仔山羊殿、林に遊ぶ猿之助、樹蔭に息ふ象太郎、目に見、耳に聞くもの、一つとして快からざるはなく、あらゆる宇宙の幸福を集め盡した處である。

アビシニヤ大王は毎年時を定め、此の谷に來て、王子王女を訪ねられ、其の徒然を慰め給ふ。大王行幸の日には、音樂の響につれて、洞穴の鐵門が開

かれ、其の後宮中にては八日の間、いろくの遊戯が行はれる。此の折人民の中何かの遊戯に巧みな者は、長く此の谷の中に住むことを許し給ふ。それ故歌を歌ふ者、琴を弾く者、舞を舞ふ者、皆有らん限りの力を盡して、國王の賞讃に預からうと思ふ。

しかし、人一度此の谷に入るを許されては、再び其の外に出て歸ることを許されず。歳毎に新しい樂を工夫して、國王の褒に預り、歳毎に入り來る人も増すが、又歳毎に此の極樂の谷に住むを厭ふ者が出來るとは何故であらう。

王子等の宮殿は、湖水から三十歩ばかり高い處に立つて居る。位の高い人、卑い人の住む室々は、一々飾を異にして居る。屋根は厚く重き石の四屋根で、石と石とは、年経るにつれて堅くなるセメントで繋ぐ。それ故に千秋萬歳、雨にも風にも、碎けず動かず、繕ふことも無いのである。

宮中は甚だ廣いから、其の細い秘密は、代々親から聞き傳へた役人でなければ、知る事も叶はぬ。此の宮殿は疑念といふものが、組み立てたのであらうか、室といふ室には表と裏の二道が有つて、トンネルやら隠れた廊下やら、萬一の危険に備へた様、實に至れり盡せりである。多くの柱には、中に穴を穿つて、代々國王の寶を隠し、大理石を以て其の口を蔽ふ。國の危い時でなければ、此れを開かず。又一冊の書に此等の寶を記入して、國王が皇太子を伴つて登る外、誰も登ることを許されない塔の上に藏めて置く。

此の谷を極樂の谷と云ふ。

二 ラセラス王子極樂の谷を好まず

アピシニヤの諸王子、諸王女は、斯くも楽しい天地に住み、清香の上に眠り、妙音の下に覺め、日々變化ある樂みを樂しむに忙はしい程であつた。其



の學問の教師は、極樂の谷の極樂を説き聞かせ、人間の生涯の苦しさを語り、谷の外は人々相噬む災害の巷であると教へる。王子王女皆之を信じて、自己の幸福を感謝し、他人の不幸を憐むのである。

然るにラセラスは、今年二十六歳、如何した事か、此頃遊戯宴會にも出でず、獨り思ひに打沈んで、散歩さするを好む様になつた。山海の珍味を前に置いて、食ふ事を忘れたり、音樂の途中で急に立ち去つたりする。侍臣等心付いて、是非に王子の氣を取り直さんものと、心配した。然し王子は其の誘ひに應ぜず、日々流のほとりに獨坐して、小禽を聞き、魚を眺めて居らる。或は山上の牧場に麋鹿を侶とし、或は湖水の岸に白鳥を樂んで居ることも見受ける。ラセラスは如何したのであらう？

ラセラス王子の様子の変つたのを怪んで、或る夜一人の老先生が密かに王子の後に從うて行つた。王子は背後に人有りとも知らず、岩間に草を食ふ山

羊を打眺めて、思ひに沈んで居る。そして時々獨語を言ふ。

「人間と獸と何處が異なるのであらう。飢え渴く所、飲み食ひする所は同じである。足らざるを悲しむのも同じである。然るに自分は飲み食ひしても獸の様に安心して楽しく暮すことが出来ない。足らざるものを満足させても、何かまだ足らない氣がする。鳥も歌ひ、我も歌ふ。然し自分は同じ音樂を二日も續けると倦いてしまふ。」

などと言ひながら、折しも東の山に上つた月の影を仰いて嘆息する。

「あゝ、どうも人間には、獸と異つた慾が有るのである。又過ぎた昔の悲みを考へ起して悲んだり、まだ來ぬ先途の事を心配したりする。獸に優る樂みも有れば、又彼等に無い苦痛も有る。」

行く行く左右の羊を顧みて「決して人間を羨むな」など慰める。
老先生は之を聞いて、王子の樂しまぬ理由を知り、翌朝早く王子の居間に

訪ねて行つた。然るに王子は「此の先生、もはや老人になつて、俱に語るに足らず、其の話を聞くも益なし」と思つて、例日の通り外へ出て行つて、林の中に入つて獨り考へ初めた。

王子が考へて居ると、何時の間にか老先生が側に來て居る。王子は立腹して立ち去らうと思つたが「昔はいろ／＼と面白き話を聞かせ呉れたる先生なり、老耄したからとて叱つては不憫」と思ひ、先生を召し連れて、池の堤の上に坐つた。

先生「殿下は何故に、他の人々と共に御樂みなされぬか。」

王子「遊戯も面白くなし、又自分に悲みがあるから、其の爲め他の人々の樂みを妨けても悪いからだ。」

先生「此の極樂の谷には、苦みも悲みも無く、又恐しい禍も有りませぬ。殿下の御不足と思召すは何て御座る。」

王子「萬事足りて、足らぬ物の考へられぬが、吾が不足である。何事か不足が有つたなら、之を得やうといふ望も生じ、勉強する甲斐も有らうに、毎日、たゞ日の長さに苦んで居る。乳房を離れた仔羊が、獨立に餌を求めんと、岩角走るが羨しい。國王の子には、物を求める樂みが無い。見る物、聞く物、珍しかつた小兒の時代が戀しくなつた。何ぞ、其方は我が望むべきものを知らぬか。」

老先生、之を聞いて、王子の愁の尋常ならぬに驚き、答へん言葉も知らなかつた。漸く思ひついて、

「殿下よ、殿下未だ人間の生活の苦しく悲しきを知り給はぬ爲め、今の御有様を御不足に思召さるゝなり。」

王子遮つて、「オー其れぢや、其れぢや、是非に世間が知りたい。見たい。其方、世間を見せて呉れ。」

三 逃亡の企

老先生は、王子が極樂の谷から出る様な望を持たぬやうに、慰めやうとしたのであるが、却て意外の志を引き起して、大層残念に感じた。然し時は早や夕暮で、常の如く音樂會の開かるゝ時刻である。相圖の鐘が鳴るまゝに、二人の談話もこれにて終つた。

世間の有様を觀たいといふ希望を持つてからは、王子も此の世が楽しくなつて來た。昨日は吾が命の長さを恐れしたが、今日は年未だ若くして、長く研究の出来るのが喜ばしいと思ふ。すべて人は望の有る間は元氣で、勉強もするものである。寔に望は大切なものである。

王子は如何にもして、此の谷から逃げ出さうと考へて、而も人に悟られてはならぬ爲め、殊更に他の人々と遊戯音樂を共にし、人の之に倦きて、眠り

などする間に、獨り逃亡の企をした。時としては、竊かに未だ見ぬ世界の様子を考へ、或は身を艱難の間に置き、或は人の苦患を救ひ、或は冒險探検に成功することなどを想像する。

或る日の事、王子は池の堤に立つて想像へた。或る家の女主が、命と頼む金を悪人に奪はれ、大聲揚げて其の後を追ふ。王子は女を助ける積りて、居りもせぬ悪人の後を追つて走る。追つてゝ追ひ續けて、遂に山の麓に衝き當つた。

王子は前の山に氣が付いた。あゝ、これは事實ではなかつたか。若し此の山が無かつたなら、走りつゞけて外の世界に出られたものを。此の山は我が樂みと望とを妨げるものである。さるにても何故に、未だ一たびも此の山を越えて望みの世界に逃れる方法を考へなかつたのだらう。

思へば世間見物の望を起してより、はや二十個月。此の間地球の太陽を回

ること二度。月の盈ちては缺けること實に二十幾回。我は唯茫然と大空を仰いで、日の東より西するを眺むること六百日。雛鳥は巢を立ち、仔羊は乳を飲まぬに至つた。茲に吾が脚下の水、逝さくして晝夜休まず、天地の教は常に深き心あるに、我は愚かにして悟らず、二十個月を、可惜、還らぬ過去に葬つた。』

其の後、王子は空しく時日を費したのを悔い、兎角物思ひに打沈んで、更に四ヶ月も徒に過した。或る時一人の女官が有つて、一個の陶器を碎いた。女官曰く、『死んだ子の年と、割れた茶碗は數へても駄目です。』王子之を聞いて、夢の俄に覺めた様に悟つた。『過去をして過去を葬らしめよ。將來の事を考へねは愚者である。』と悟つた。細かい所にも人は大なる真理を悟るものである。

あゝ如何にして此の谷の外に逃れやうか。籠の中の鳥、翼有れども飛ぶ由もない。四面に立て連ねたる山の頂、未だ登り越えたる者を聞かない。彼の入口の鐵の門、人間の力で開かれさうもない。よし、さらば深草の繁みの奥に隠れた抜け穴もや有る。一つ探し出して見やうか。など考へて王子は獨りて數週間、求め歩いた。が唯知り得る所は劍の如く削ぎ立つたる山山の、鳥ならては登りも得ざる事ばかり。

さればと云うて、湖水の溢れて、たぎり落ちる谷間を窺ふに、岩角立ち疊り、相交つた間を、水は躍りつ、堰かれつ落ちて行く。生命ある者の通過し得る處にあらず。

王子は少からず失望したけれども、世間見物の望は捨てず。唯此の望ある爲に、日毎に楽しく勉強し、朝は新しき希望を以て覺め、夕は其の日の勉強

を願み樂しみ、夜は疲れて善く眠る。實に勉強は幸福の母である。

四 空中飛行器

極樂の谷では、種々遊戯の道具を作る爲に、多くの職工を招いて置く。其の一人に器械の學に勝れ、技術の巧みな者が有つた。或は水車で水を塔の上に送つて、宮殿の各室に別ち、或は器械で雨を降らせて、夏の暑さを和げ、或は王女たちの遊ぶ林の小川に水車を造つて、大團扇を回轉させ、風なき時も涼しき風を起し、又風と流との力で鳴る樂器を作り、之を各處に置いた。ラセラスは此の職工の技術と智慧とを喜び、何日か谷を出てた時には、何かの働きをするだらうと思ひ、度々訪ねて行つた。或る日王子が遊びに行くと、職工は軍艦を造つて居た。王子は面白い事に思つて、褒てやつた。職工は答へて、「殿下よ、殿下は未だ之よりも驚く可き器械を造る事が出来

ると云ふことを知り給はない。舟や車は遅くて用に足りませぬ。鳥の翼の様な早い飛行器を造るが宜しい。空中の原野こそ智者のもので御座る。唯愚人と怠け者ばかりが地の上を匍匐ふのでは御座りませぬまいか。」

王子は此の話を聞いて、周圍の山を飛び越えたいと云ふ氣が起つた。尙ほ詳しく不審の點を聞くと職工は答へて、「さればです。殿下。人間は陸上の動物で有りながら、能く水中に泳ぐ事が出来ず。空氣は水と同じもの、唯空氣は水より軽く、水は空氣より重いばかりの相違て有ります。鳥が空中を飛ぶのは、軽い水の中に泳ぐのだと申しても宜しう御座いませう。力だに多く出して煽つたなら、人間にも鳥の様に空中を泳げぬ道理は御座いませぬ。水なら泳げるではありませんか。」

空中飛行器と申すものを造つて、殿下が之に御乗り遊ばされ、世界の處々に到り、時に青空の奥に隠れ、時に大海の上を巡り、沙漠も、都府も、野も

山も、自由に御見物遊ばすことが出来ましたなら、如何に御樂しき事で御座
いませう。私共、曾て空を飛ぶ鳥獸の構造を研究致しまして、蝙蝠の翼の宜
しい事を悟りました。どうぞ其の翼を手本として明日から人間の飛行器製造
に取り掛りたる存じます。一年以内には成就いたします。殿下此の儀を他人
に御漏し遊ばされぬ様、御願ひ致します。萬一敵國の悪人共の知る所とな
つて、彼等が斯る翼を以て、此の國に攻め入るやうの事が有つては、一大事
で御座ります。城も壘も役には立ちませぬ。此の極樂の谷も、野蠻人の領地
になるかも知れませぬ。』

王子はそこで他人に告げぬとの約束をして、職工に空中飛行器、即ち人間
の羽を造らせた。時々其の製造場に御行てなされて、相談したり、勵ました
りした。職工も日々製造を進めて、何日かは隼や鷲の威張つて居る天の領
地を、人間のものに爲てやるぞと自慢をして居た。王子は其れを聞いて益々

頼もしく思つた。

五 學者イムラクの遊歴談 (其の出發)

製造に着手してから一年で、人間の翼は出来上つた。職工は之を試みやう
ものと、或る朝、山の上から音荒々しく乗り出して、空中に上つたが、遠く
行かないで、湖水の中に落ちてしまつた。空中の翼は幸に湖上の船となつ
た。王子は直に職工を助け出してやつたが、殆ど半死半生の體であつた。

王子は其の失敗にも屈せず、尙ほ逃亡の企に就いて考へたが、どうも良
い工夫も浮ばぬ。折しも時節は秋になつて、例年の雨期に入つた。此の年は
特に大雨が引續いた爲め、河も湖も溢れ出して、極樂の谷は一面の海、宮
殿は海の真中の島になつた。羊も山羊も皆山に入つた。王子も林間を散歩す
ることが出来なう。

諸王子諸王女は皆室内の遊戯に暮す。ラセラスは平生イムラクといふ學者が、世間の事の事を誦うた詩を喜んで讀んで居た。イムラクは能く外國の事に通じ、人情に精しく、詩文を作るに巧みてあつた。王子は彼を呼んで種々の物語を聞き、毎晩夜の更るを忘れた。

熱帯地方では、涼しい夕方のみが、遊戯娛樂の時期である。ラセラスも夕暮の間は、音樂の會に招待される。或る夜、會から歸ると、はや十二時近くなつたが、イムラクの物語の聞きたさに、人をして彼を招かしめ、其の經歷、殊に外國遊歴の物語を聞いた。イムラク語つて曰く、

『殿下よ、私の經歷は格別長くは御座なく、又學者でありますれば、いろく世の中で働く人の様な、變化も有りませぬ。世の學問の無い人には私の人に勝れた所も解りませぬ。』

私の父は大商人で、常にアフリカの内地に駱駝の隊を引伴れて行商に行

き、アピシニヤの北の紅海あたりにも貿易に行きます。正直でありますが見識が無い爲に金はかり欲しがつて居ります。而も役人に取られまいと思ひ、金を隠すに心配して居ります。』

王子『此のアピシニヤの民が、役人から金を取られるやうな事が有つてはならぬ。それは我が父上、アピシニヤ大王の政事の行き届かぬのである。我れ若し王になつたなら、そんな氣の毒な民は一人も無いやうにしやう。』

イムラク『殿下は未だお若いから、左様に御思召すてありませう。多數の役人は一々大王が御監督なさることも出来ませんから、悪い役人も出来るので御座います。それは兎に角、私の身の上話を申し上げますれば、私の父は、私を商人にするつもりで教育致しました。私の學校の成績の良いのを見て此の子は必ずアピシニヤの大金持になると喜んで居りました。而も私は學問して知識の増すのが喜ばしく、富よりも物の道理が尊ばれ、父の吝嗇を卑

しました。子の願が新し過ぎましたか、父の望が古過ぎましたか、何日の世にも此の様な親子の考の行違ひは有るものです。それで私は決心して父の希望に背かうと致しました。

私が二十歳になりました時、父は私を商業に遣らうとしまして、地下の寶庫を開けて、十個の千兩箱を取出し、申さるゝには『これはお前の商業の資本ぢや、自分はおもと二千兩にも足らぬ資本で、今の豪商になつた。此の一萬兩を増すも減すもお前の力次第ぢや。』と言はれました。

私は其の金を駱駝に積み、紅海の岸に旅行しました。初めて廣い海を見ました時は、籠の鳥が天に戻つた様な、廣い心になつて、勇氣はいよく加はり、海の彼方の外國を見物し、アビシニヤに無き學問も致し度いと思ひました。偶々或る船長と知り合つて、スラトへ乗せて行つて貰ふ事になりました。自分は知らぬ處が見たいので、行先は何處でも宜しかつたのです。スラ

トと申しますと、印度の港であります。(現今人口十二萬あり)

六 イムラクの遊歴談 (印度、ヘルシヤ、アラビアの話)

イムラクは語り續けて曰く、『船で初めて大海に出ました時の心地好さ、東を見、西を眺め、波を迎へ、雲を追ひ、其の楽しさは盡きませんでした。然るに幾日ならずして、景色に變化なきを物足らぬ様に思ひ始めました。時には人間の一生も此んなもので、初め楽しいと思つた事も忽ち苦しく、美は醜に、善は惡に、希望は失望に終つてしまふのではあるまいかなど考へた事も御座ります。然し又時に、上陸すれば面白いものも有るであらう、山や谷や都や沙漠や、種々見なれぬ物も見られるであらうと思ひ返し、漸く心も落ち着いて、水夫に航海の術を尋ねなどして慰めました。併し愈々航海に倦いた頃、丁度スラトの港に着きました。そこで持つて來

た金子を、品物の中に隠し、隊商に加はつて印度内地に入り込みました。然るに同行の商人は私の金持なるを知つて、奴僕や官吏を唆かし、私の金子を奪はせました。彼等は私を欺く権利が有る様に思つて居つたのです。又私の様な商業に慣れぬ者は、其の金子を失うて、初めて虚言の稽古が出来るのだと思つたのでありました。彼等は何の益も無いのに、私の困るのを見て喜んで居りました。』

王子『自分に得も無いのにそんな事をして喜ぶ者が有るのか。』

イムラク『嫉妬は吾が幸福を樂まず、他人の不幸を喜ぶに過ぎません。彼等は唯私の富を羨み、私の困るのを悦んだのです。』

さて其の人々と印度の西北州のアグラ市に行きました。アグラは(現今人口十九萬)モンゴル帝國の首府でありまして、モンゴル大皇帝の宮城が在ります。此の國は耶蘇紀元の十六世紀頃から盛になりました國で、殿下も御承

知てありませう、彼の有名なアクバル大帝の建てた宮殿の如きは、麗しい岩を以て造り、精妙な彫刻を施したものであります。其の他澤山の宮殿が有りました、中にはアラビア風や、イタリヤ風を加へたものも有ります。

さて私は數ヶ月にて其の地の言葉を學び、多くの學者と談話する事が出来る様になりました。學者の中に王子達の太師が有りました爲め、私は幸に大皇帝に謁見することを許されました。其れより私の名は宮中に知れ渡りましたから、同行の商人共は宮女達に商賣せんものと、頻に私に取次を頼みます。然し私は彼等が宮中の者を欺いて、暴利を貪らんとするものと信じて居りましたから、取次ぎません。彼等は私が前日の怨を返すのだと思つて、頻に私に賄賂など贈らうとしますが、私は全く不正な彼等を助けませんでした。

アグラの學問や見物を終つて、私は西の方ベルシヤに入り、ギリシヤを蹂

蹴つたクセルクセス大王や、アレクサンドル大王に敗られたダリオス大王の昔を偲び、厳しい城趾などを見ました。ペルシヤ人は交際を好み、我が見物や學問をするに好都合でありました。

其れから私はアラビアに行きました。アラビア人は牧畜の民でありまして、勇敢で戦を好みます。然し他人の富を羨み貪る譯ではない様でありまして。アラビアではメツカ（現今人口四萬）の市に於て、ムハメッドの神殿に掛けた詩の卷々を詣記しました。私は到處詩歌が尊ばれるのを見て、詩人の仲間人をしやうと思ひ初めたのです。そこで古人を學ぶは面白からず、宜しく自然と人生とを研究して、新しき觀察を以て歌はうと決心しました。これより後、天地間、有りとも有らゆる森羅萬象が、私の研究の題目となり、眼に見えぬ程の塵埃にも、言ひ知れぬ樂みを感じ、廣大無邊なる天の彼方の群星も、私の研究して歌ふ可きものとなつたのであります。此の自然人生の研究

が詩人の大事業でありまして、之が出来れば大詩人になる事は難事ではありませぬ。』

七 イムラクの遊歴談（シリア、エサプトの話）

王子は心少しも旅行の事を去らず、イムラクの詩論をもどかしく思つて、中止させ、アラビアから更に何處に行つたかを尋ねた。

イムラク曰く、『私は更にシリアに廻りました。シリアは地中海の東の國で、富んで居ります。私は其處のバレスチナ市に三年滞在しました。バレスチナはイエス・キリストの墓の在る處ですから、ヨーロッパ人も多數集つて居り、私も彼等と交際することが出来ました。彼等は國が富み、兵が強く、其の陸軍海軍は優勢で、世界を支配して居ります。ヨーロッパを吹く風とアフリカの風とに、相違は有りませんが、彼等は我がアフリカやアジアと貿易して、其

の富を奪ひ、且つ之を征服するに、此方はヨーロッパの波打つ岸に攻め寄せ
 ることも叶ひません。思ふにヨーロッパ人は一切の智慧を磨いた爲め、進ま
 ぬ學問なく、従つて我々が手足を勞して行ふ事を、彼等は器械を以て、容易
 に成し遂げる。死ぬべき病を癒し、渉る可からざる河に橋を架し、山をも穿
 ちて道を通じます。寔に智を増すは、樂みを増すのであります。昔東洋の支
 那にては、蒼頡といふ學者が、今の漢字といふもの、古字を創作して、人間
 が學問を始めた爲め、心配苦痛といふものが起つたと申します。又バレンスチ
 ナに住みましたユダヤ人の宗教では、人間の先祖はもつと幸福で極樂の園に
 住んで居たのに、或る時智慧の木の実を食つて、智慧が出来、今の様に種々
 な事を考へるから苦痛が起つたと説いて有りますが、私は之に反對です。智
 を増すは、幸を増す始めと申して差支へ御座いませぬ。

さて私はバレンスチナを立ち去りまして、アジヤの諸州を巡り、文明の國で

は商人になり、野蠻の處では順禮の風をして歩きました。然るに追々疲勞を
 生じ、故郷が懐しくなつて來ましたから、アビシニヤの方に足向け、先づ
 エチプトに行き、首府カイロに留ること十個月、四千年前のエチプト榮華の
 遺跡、高い塔や城門や禮拜堂を尋ね廻りました。(カイロ府は現今の人口四十
 萬)

それから私は東の方スエズ港に参りまして、船を備ひ、紅海を南に渡りて、
 二十年の昔出帆した港に還りました。(スエズは今のスエズ運河の南の口に有
 り。人口一萬餘)

私は初め、故郷に着いたなら、必ず多數の親戚朋友から歓迎され、父は其
 子の學問成就し、見聞廣くなれるを喜ぶならんと、樂んで居りました。安んぞ
 知らん、家に着けば父は早や十四年以前に、黄泉の客となり、私の兄弟は皆
 家の財産を分配して他國に去り、朋友とても、私を以て他國の人の様に思ひ

做し、學校を開いて生徒に教へんとすれども之を妨げ、遂に何事も成らず。興るも衰へるも人の世の習なれば、初めの内こそ元氣を起して、勉強しましたれど、如何ともすること能はず、茲に身を世間の外に捨て、朝に夕を計られぬ、有爲轉變の風吹かぬ此の極樂の谷に入らうと願ひました。幸に私の音楽が、大王陛下の御意に適ひまして、今此處に世外の人となる事が出来ました。』

王子は學者の物語盡くるを待つて、『汝の話、寔に面白し、而して汝は此の谷に住むを楽しく感ずるか。』

イムラク『私は過ぐる日の旅行など思ひ起し、又出來得る限り天地自然の物に樂みを求めて、詩を作り歌を歌ひまするが故に、左程苦痛とは存じませぬど、此處に殿下に扈從致して居りまする者で、此の谷に入つたのを後悔せぬ者は御座りませぬ。』

王子『イムラクよ、我も此の谷に住むを厭ふ。如何にかして逃げ出づる方法は無きか。汝は我が親友である。我が爲に盡力して呉れよ。』

イムラク『いや殿下。殿下は必ず逃げ出られた事を後悔せらるゝ様になります。殿下の御足一步山外に出て給はゞ、世界は此の谷の様に平安無事ではありませぬ。悪人あり、姦物あり、種々様々の者あり。殿下をお苦しめ申す時が御座ります。』

八 拔 け 穴

王子は謝してイムラクを退かしめ、獨り物思ひに沈んだ。如何なる困難の我が前途に横はるもの有りとも、一たび立てたる志は捨てじ。精神一到、何事の成らざるものあらん。必ず逃亡の企を遂げ、世界見物の望を達しやうと決心した。

暫くして洪水も治まり、谷も乾き始めた。王子は即ちイムラクを随へて散步に出で、且つ進み且つ語つた。鳥は翼有つて自由に山嶽の峻しさを踰ゆるに、人は日々麓に立つて、峻嶺の攀ぢ難さを悲しむ。思へば人間の力は薄弱なるものである。然し斯く考へた時、人は初めて進歩することが出来る。腕の力や羽の力に頼むは愚かである。人間の精神の力は、天地間、何物の力よりも強い。工夫である、工夫である。人間が豪い事をするのは工夫である。

王子或る日、イムラクと城壁の下を歩いて居ると、洪水を避けた兎數匹が、叢中に穴を穿つて居る。イムラク曰く、「昔フランク帝國のカロロ大帝は、敵に追はれて河を渡る時、牡鹿が渡つた處を、淺瀬と知つて、軍隊を渡らせました。其の爲に今フランクフルトと云ふ處が有ります。東洋の支那といふ國では、蒼頡といふ人、鳥の趾を見て文字を作り、又孟嘗君といふ人は、鶏の鳴聲を擬させて、關門を開かせ、敵國かれ逃げた例も有ります。今我々が

兎の智慧を學ぶも、決して恥ては有りませぬ。城壁の下に穴を穿ちて、城外に出たらば宜しいではありませんか」

王子の喜び、譬へるに物も無い様であつた。早速道具を作つて、翌日から適當の處を穿ち始めた。王子は忽ちにして疲れ、草の上に倒れては歎息したが、イムラクは王子を勵まして、「殿下よ、事の急に成らざるを以て失望せらるゝな。昔より困難なくして望を遂げた人は有りません。斯く毎日少しづゝ勞働しても、吾々の力が次第に増して來ます。塵も積れば山となる。毎日三時間づゝ歩行すれば、周圍一萬里の地球も七年で一週が出來ます。』

毎日山を穿つて居ると、幸にも岩と岩との間に大きな洞穴が有る處に至つた。

斯くて着々工事を進め、やがて城外に掘り出づる頃であつた。王子は少

し新鮮な空気を味ふ爲に暗い穴から出て来た。驚くまい事か妹のネカヤ姫が立つて居る。折角の骨折も空しくなつて、一切の秘密は顯はれ、遂に逃亡は出来ぬのであらうか。』よし、ネカヤは吾が最も愛する妹なり。事實を語つて、人には告げぬ様に頼まう』と、事の概畧を言うて聞かせた。

ネカヤ姫は笑つて、『兄様、御心配なさるな。私は探偵では御座いませぬ。私はいつとも御話を聞かせて下さる兄様が、私を捨て、毎日同じ方向に朝早くから御行き遊ばすから、多分芳ばしき草の茵の上に、談話や讀書を御樂しみ遊ばすものと存じまして、懐しさの餘り尋ねて参りました處、此の様な御企が有らうとは夢にも思ひませんでした。初めは驚きましたが、次には私も兄様と共に、此の籠の世界から抜け出して、廣い天地を見られると楽しくなりました。何卒私も御一緒に御伴れ遊ばして下さいます。御願て御座います。』

王子は一たびは拒んだけれど、愛する妹の願なれば遂に之を承諾し、更に數日間工事を急いだ。いよいよ工事の出事上つた時の王子の喜びは思ひやられる。幾度兩の手を舉げて、萬歳を叫んだであらう。如何に雀躍したであらう。山の頂から見れば、ナイルの大河、銀の糸の如く、北の方エチプトの野を指して流れて行く。足はアムハラ山の土を踏めど、心は遠くアビシニヤの外に在る。王子は歸ることも忘れた。イムラク、乃ち王子を促して一旦宮殿に歸り、ネカヤ姫と三人にて旅行の用意を急いだ。

九 逃 亡

ラセラとネカヤとは、賣つて大金を得るやうに多くの寶玉を携へ、イムラクの注意に従つて、之を衣服の間に藏し、満月の夜の來るを待つて、宮殿

を去つた。月光霜の如く、満谷に落ち、湖水は銀波を漂はせ、梢は露を帯び珠を綴る。倦きたれども、幼きより住ひたる宮殿、立去るに別離の悲みが無からうか。室を出て、階段を下り、庭を過ぎ門を去る。今しも盛な音楽の音も、次第に背後に遠ざかつて行く。月の光に願ては、名残を惜む。一步に一願、一願に一步、漸く日頃穿つた洞穴の口に着いた。

其の洞穴を潜り、城外に出た。月は天上に限なけれども、下界は遠くして、雲煙模糊たり。姫は平野の中に、識らぬ人に逢ふたらう、道に迷ふたらうなど畏れ初めた。王子も亦さる様子有り。イムラク二人を勵まして、峻き山を下つた。

故里の既に見えぬ處に來着きては、心も定つて、家と思ふ氣も薄らいだ。夜明けて野原に出て、牛牧者に牛乳と菓物とを貰つた。疲れて餓えた身には山海の珍味にも勝して尊かつたが、姫は王子王女を待遇ふに、宮殿もなく、

立派な食卓も無いのに驚いた。

城から追手の出る心配もなく、又旅に馴れぬから、初めは徐ろに進んだ。行く／＼珍しき風俗に接し、異なる人間を見て、王子王女喜ぶ事限りなく、イムラクは又其れを見て喜んだ。

併し王子は到る處、人民が己に服従せぬを怪しみ、王女は誰も己の前に平伏する者なきを不思議に思ふた。イムラクは二人の様子が、未だ世間に馴れずして、人の疑を惹き起さうかと心配し、數週間或る町に滞在し、人情風俗を教へ、極樂の谷と世間とは、異なる所が有る事を説いた。二人は漸く貴人の高ぶる風を減じ、港の雑沓も、商業場の荒々しき風俗にも、忍耐し得る様になつた。凡そ侍婢家僕にかしづかれて、何不自由なく育つた者は、此の王子王女の通り、自分以外に人間の有る事を考へぬ、我儘者となる。能く世事を考へるに及んで、初めて謙遜や我慢忍耐の大切なことが解るのである。

王子等は種々の珍しきものに見取れて、前途の有るを忘れたが、未だアビシニヤの内だから、發覺の心配あり、長く留る事もならず、遂に船に乗つてスエズに渡り、更に西の方エジプトの首府カイロに入つた。カイロは曩にイムラクが十個月ばかり滯留した處である。彼等は長くカイロに在つて、社會百般の事物を研究することに決したのである。

下篇 カイロ府留學

一 留學の初期

カイロ府はエジプト國の首府で、ナイル河の東一哩の處にある。或はアラビア人の領分になり、或はトルコ人の領地になり、或はイタリヤ人に取りられ、或はイギリス人に取りられた。其の近傍には彼の有名なピラミッドといふ三角塔が多く有る、ピラミッドは四千年前に建てられたもので、何れも其頃のエジプト國王の墓である。漢字の金字に似て居るから金字塔とも云ふ。現今此の金字塔を見に行く者や、ナイル河の上流地方に旅行する人は、大抵先づカイロ府に立ち寄るのである。

此地にはアラビア人の建てた多くの建物がある。其の一つを記さうか。サルタン・ハサンの禮拜堂と云ふのは、外部は金字塔の大岩石を取り來つて築

き、壁の高さ百十三呎床の形は方圓不規則で、屋根は煉瓦の圓屋根、上には二百八十呎の細く長い櫓、恰も春の野に抜け出す土筆の様な櫓が二つ立つて居る。又壁の上には凡そ六呎許りの軒が幾重にも重り合つて出て居る、外から仰ぐと蛇の腹の様に見える。壁の上には繪畫あり、彫刻あり、アラビア風の窓あり、四方の入口は高く尖つたアーチ形の門で、其の東にあるのは最も大きく、高さ九十呎、幅六十九呎ある。之を入れれば禮拜や祈禱をする莊嚴な壇がある。其の壇の奥にはモハメット教の神様の靈廟が有る。靈廟も亦アラビア風の建築で、尖つたアーチ形の入口、軒蛇腹など不思議に美しく造つてある。之は西洋紀元千三百十五年頃に出来たのであるから、ラセラス王子が留學して居つた頃は、今よりも新しく且つ美しく見えたであらう。

イムラクは王子に告げて曰く、「殿下、カイロ府はアジア、アフリカの學問商業の中心であります。殿下は各國の種々な人民を見ることが御出来なされ

ませう。私はこれから商業を始めまして、金持と云はれて尊ばれませう。殿下は外國から見物に来た漫遊者だと被仰つて御遊ひなさるが宜しう御座います。」

イムラクは王子等と持つて来た寶玉を賣り、資本を調へて、立派な邸宅を構へた。禮拜正しいから、人々彼を喜び迎へ、心が寛ければ友人も出来、多くの人と交る様になつた。

王子王女はイムラクの家に居つたが、イムラクが人望を得る理由が解らなかつた。市街を歩いて、人民の己を國王の子と思ふ者もなく、尊敬もしない。王女は初め外出を厭ひ、室内にのみ隠れて居た。幸に新にベクアといふ忠實な腰元を得て、これを相手に慰んだ。

二年ばかりで、王子はエジプトの言語を學び、又貨幣の使用法を知り、漸く世間に馴れて来た。馴れるに従つて世間が面白くなつて来た。見るものも

聞くものも、楽しくないものは無い。人間は到る處幸福なものと思はざるを得ない。イムラクは王子の説を聞いて、人間は左程幸福ではない、不幸な者もある。笑ふ者と共に、泣く者も悲しむ者もある。など、教へやうとも思ふたが、王子の未だ深く世を解せずして楽しい夢を見て居るのを妨げてはならぬと、思ひ止つた。

然るに或る時、王子はイムラクに向つて曰く、「イムラクよ、我れ此頃初めて氣付いたのであるが、吾が樂みは友人の樂みに及ばぬ様ぢや。彼等は實に心から樂しく暮して居るが、自分は左程愉快でないやうだ。我が笑ふのも樂むのも我が悲みを隠す爲と思はれる。」

イムラク「悲も喜も半ば我が心の仕業であります。殿下が御自身の樂みを不足に思召す如く、御友人も亦同様の感を持つてありませう。人は皆他人を羨みます。自分の持たぬものを他人は持つと思ふから、嫉妬など云ふさも

しい心が起ります。それ故賢人と云はるゝ者でも、幸福の地位を選ぶことが六かしくあります。』

王子「然し自分は明日からは、奢侈、儉約、勤怠、上下貴賤、總ての人々に交つて、其の幸福を研究して見やう。」

二 愉快な青年の研究

王子は其の翌日から大に各種の人間の幸福を研究しやうと決心した。自ら考へるに、青年の心は最も樂しい。『よし愉快な青年の群に入らう』と、多数の青年と共に遊んだ。然し數日の中に青年が物足らなくなつた。青年は愉快であるが、其の樂みは空の空なるものである。青年は塵の動くを見ても笑ふ。少しも深い考が無い。彼等は規則や禮儀が嫌ひだ。而も長上、學者、權門の批判に對しては、常に耻かしく思ふ。不動の基礎なき空なものは幸福では

ない。又耻ぢたり恐れたりする點が有れば、幸福ではない。

王子遂に青年等と共に遊ぶを愧ぢて別れた。別るゝに臨んで彼等に一言の忠告を與へた。曰く、「青年は重ねて來らず、學問は成り難いものである。徒らに我儘をして遊ぶは、老後の不幸を思はぬ愚の事である。吾等は年の老い易さを顧み、身の病み易さを思うて、勉めねばならぬ。」

青年等は奇異のことを言ふ者も有る世かなと怪みて、少しも耳を假さず、一同大聲揚げて笑ふこと暫く、以て王子の歸り去るを見送つた。

三 賢人の研究

王子既に愉快なる青年の幸福に満足せず、市中を散歩して他の幸福の研究を始めた。或る廣小路に來ると、大きな家に多數の人が、流れる様に入り込んで居る。王子も門を入つた。演説會である。

一人の博士が今しも演壇に立つて、嚴かな態度をして道を説いて居る。其の明かな高さ聲、其の巧みな言葉、種々の例を擧げ譬を引いて、人々を動かす雄辯、王子はそゝろに感心せざるを得なかつた。演題は「感情の抑制」と云ふのである。

其の説く所は、東洋では佛教、西洋ではストア教の教へる所に似て居つた。曰く、「人間の本性は明かな理性といふ知の能力であるけれども、情慾といふものが有つて、種々の妄想や迷ひを生ずる。此の迷ひの雲に蔽はれて、理性の月も、皓々とした光を放つ事が出來ない。それ故に此の情慾を抑制して、本來眞如の月の光を輝かす様にするのである。然るときは人は他人を羨み嫉みて一生を終る様の不幸もなく、空しき望を追うて失望することも無い。慈悲心に富んで而も弱からず、世間の荒波の間に、毅然と立つて己の自分を全うし、吉凶禍福の爲に、心を亂さず、天下一切の幸福を其の掌中に握ること

が出来ぬ。』

王子之を聽いて大に心を動かし、是れこそ吾が一生の師と仰いて、幸福を得る道を學ぶ可き賢者であると思ひ、歸つて之をイムラクに相談すると、イムラク曰く、『殿下は未だ自ら實行せずして、唯道徳の理論を講ずる人の有ることを御存じないと見えます。彼の言ふ所、天上の人の様でも、其の行ふ所、其の喜び悲しむ所、或は普通人以下かも知れませぬ。』

王子は一概にイムラクの言ふ所を真とせず、或る日其の博士の家を訪ねて行つた。賢者は其の家に入るを許さない。そこで金銭の効力有ることを思ひ起し、金子の包を贈つて奥座敷に通ることを許された。賢者は蒼い顔色をして出て來り、王子に言ふやう、『貴君は私が如何ともすることの出来ぬ時に來られた。私には一人の娘が有つて、杖とも柱とも寶とも愛して居りましたが、昨晚熱病で死にました。私は悲しくて今日は御話

も出来ませぬ。』

王子『人の生死は天地自然の道、先生の如き賢人の心を動かすに足るまいと思はれます。先生、先日御演説にも吉凶禍福の爲に其の心を亂されずとか承はりましたが、御自身道理をお忘れて御座いまするか。』

博士『貴君はお若い。まだ人間死別の悲みを知らない。道理が何になります。道理は唯冷淡に「死んだ娘は活ては歸らぬ」といふ事を教へるばかりである。何の慰めになりませう。』

王子は之を聞いて、道理は斯程に力の無いものであるか、賢人と云はるゝ人でも、其の悲しい時に當つては、又斯の様に取らぬ事も言ふのであらうかと失望して歸り去つた。口に幸福の道を説く者、必ずしも幸福の師ではなす。

四 隠者の研究

王子は賢人の幸福ならぬに失望し、更に隠者の幸福を研究して見やうと思つた。カイロ府から南の方に當つて、ナイル河の瀑布が有る。其の傍の洞穴に隠れて居る君子が有つて、其の道德の高いことが全國に響いて居つた。幸福はカイロの様な繁華な都會に在るか、然る隠君子の住所に在るか。年齢と徳性とが高まつた人は、禍を避け又は忍ぶの特技を有するか、隠者に從いて研究して見やうと決心した。ネカヤ姫も、イムラクも之に賛成し、腰元のペクア等を伴つて旅立つた。

途中の原野に羊を牧ふ者が居た。これも研究の一つである。「吾々が求める幸福が或は彼等の間に落ちて居るかも知れない。暑さを彼等の天幕の中に避けると共に、少々研究して見やう。」と、牧者を尋ねて種々の事を聞いた。彼

等は野蠻で學問も見聞も浅ければ、是れぞといふ答も爲し得ず、唯、朝は星を戴き夜は月を踏んで、其の羊を牧し、都の人が、奢侈に飽きる時、自らは天幕の中に黒麵包や水で活て居る不幸を悲むのであつた。そして自分等は都の贅澤な人々の爲に、斯くも苦しめられると怨むのであつた。

牧羊者に別れて進むこと數日、道中餘りの暑さに、近き森の樹蔭に立ち寄つて涼まうとした。一條の平な道を夾んで、左右から生ひ茂つた緑に、王子は我を忘れて喜び、深く進んで行くと、音楽の音が聞える。少女共の林間に歌ひつゝ、舞踏するも見える。岡の上に壯麗な家が有る。人が出て來て王子等を迎へた。

主人は親切て又如何にも富裕な様子である。王子の尋常人ならざるを知つて、盛に響應し、イムラクの談話に敬服し、ネカヤ姫の貞淑な姿を讚美した。王子等も亦主人は眞に幸福の人ならんと察し、喜んで其の談を聴き、引留め

らるゝまゝに數日そこに滞在した。

或る日談話の間に、王子は主人の幸福を褒め讃へると、主人は頭を左右に振つて、「否とよ、幸福は外見だけの事にて、實は心に絶えぬ心配が有ります。トルコ本國から出張して此のエヂプトを治めて居る統監即ち副王は私の敵で有りまして、何時私の財産を奪ふかも知れません。それ故私は我が財産を他國に移し置き、一旦危い時には其の方へ逃げるつもりであります。此の家や庭園は皆敵の踏み荒すに任せねばなりません。命長ければ辱多しとか云ふ言葉が有りますが、これは富多ければ憂多しとでも申しませうか。私の心配の絶えた時は有りません。」

王子は富人の答の意外なのに驚いたが、之も亦一つの研究であつたと思つた。

王子等は富人の家に留ること數日、遂に農夫を傭うて案内とし、三日目に

して隠者の住所に着いた。其れはナイル河の瀑布を稍や離れて、棕櫚の樹の青々と茂つた山の中腹の洞穴であつた。

隠者は丁度窓に椅子を近けて、書物など讀みつゝ、夕暮の涼風を樂んで居つた。王子の近いて拜禮したのを見て「青年御身は道に迷つたと見えるな。

よし／＼今夜此の室に逗留せよ。然し馳走は無いぞ。」

ネカヤ姫は心の中にて、「此の人は極めて野蠻で、幸福を求める方法を知らぬ。況や人に幸福の道など教へらるゝものではない。」と思ひながら、王子等と共に窟の中に入つた。座敷は清く掃除してある。隠者自ら肉や果物を調理して夕食を供した。隠者の談話は氣品あり禮儀ありて面白い。ネカヤも感心した。イムラク曰く、「先生。吾々はカイロで先生の徳の高いと云ふことを承はつて、尋ねて参りました。何卒此の若い兄妹の爲に、世に處して行く道をお教へ下され。」

隱者聳を撫てながら、「我が教へることは、一禍と見たらば之を避けよ」といふことのみぢや。私は元、陸軍軍人として高官に昇進したが、而も年老いては後進の青年士官に及ばず、残念な事ばかり多い爲に、安心することが出来ない。因て軍服を脱ぎ棄て、此の窟に隠れ住むことにしたが、今に至つて十五年になる。曾て競争に敗れて逃げ込んだ此の窟が、斯くは隱者の生涯を送る處となつたのぢや。初めの間は海の嵐を、港に避けた舟乗の様に、極めて樂しかつたが、新しき樂みも古くなる、次第に愉快が減じた爲め、山に入つて植物や礦物など集めたが、それも遂に珍しからず、此頃は心亂れて安心成らず、人住む都のみ懐しい。隱者は惡に近かぬと共に善をも行はぬ。彼れと是れとを比較するに、劣るとも優らず。明日にも元の俗人に還り、隱者の生活を廢めやうかと思ふわい。」

王子は大に驚いたが、翌日隱者を伴れて、カイロに歸つた。

カイロには王子の屢ば出席した學者の會が有つた。隱者訪問から歸つた王子は、先づ其の學會に出席して、隱者訪問の始末を報告した。人々は王子の説を聞いて、或は慨し、或は悲しみ、元來隱者となるが誤りであるなどと論じ合つた。

時に學者の一人は、起ち上つて論じて曰く、「凡そ人は皆現在居る處を厭ふ傾向を有つて居るものである。而も暫く過ぎると却て之を惜む様になる。憂しと見し世ぞ今は戀しきといふは、實に人情の弱點である。人間此の弱點から脱れるには、宜しく自然の法に従ふ可し。人間の生れぬ以前から、此の天地間に自然の大道といふものが存して居る。水に泳ぐ魚、林に歌ふ鳥、皆此の自然法に依つて樂み居らぬは無い。人間も亦之に従ふ可きである。」

王子は『ならば自然法とは如何なるものであるか』と問うた。學者は問はるゝに従つて答に窮してしまふ。王子は此の學者も亦隱者の如く頼むに足ら

ぬ者と悟つた。

五 帝王と下民との研究

王子は何人の幸福も、確かなる幸福ならぬに失望し、更に他の幸福を探らうと、イムラクに相談したが、彼の談話は益々王子を迷はすのであつた。唯妹ネカヤ姫ばかりは、常に王子を勵まして、必ずや其の望の達せられる日が有るだらうと期して居つた。茲に王子はネカヤと相談の上、自らは帝王の幸福を、ネカヤは下民の幸福を探究することに定めた。

(52)

王子は毎日エヂプト統監の宮殿に訪ねて行つた。此の統監は前にも述べた通り、トルコ本國から出張して、エヂプトの王様を監督するものである。副王と云うても可い。實はエヂプト王よりも豪いのである。其の宮廷の人々

はラセラスの嚴かな風采を見て、遠國の王子が旅行に來たのだと知り、丁寧な待遇した。王子は次第に諸官吏や貴人と親しくなつて、宮中の様子も明らかになつて來た。位の高い人々は、互に惡み合ひ、黨を樹て、鬭つて居る。統監即ち副王は、トルコ本國の大王から、多くの探偵を附けられて、一言一行を監視される。一刻の安心も出來ない。

遂に謀反を企てたが、露顯して、捕へられた。さらばトルコ大王は幸福で有らうか。彼れは間も無く臣下の怨を受けて弑害されてしまつた。

(53)

ネカヤ姫は又下級の家庭に出入した。總ての家庭は不和にして不幸なるを見た。一國は一家庭、一家は一王國の様なもの、何れも黨派を立て、争ひ、親子すら和する者が尠い。父母は其の長さ生涯の經歷を模範として、家庭の規律を正す勇氣もなく、子女の或る者のみを偏愛するあり、或は愛に溺れ或

は酷に過ぐるあり。子女は又若き心を放ちて、自由我儘に振舞ひ、老人は富のみを欲し、壯者は才氣にのみ奔る。一家の主人にして悪しき家僕を使役するに苦心するものあり。富める親族の侮辱に苦しむあり。無慈悲の夫あり、不貞の妻あり。少女は智慧淺くして、友人の美貌を羨み、己れ同様智慧無き者と、徒らに笑ひ興ずるを好み、才徳の人を愛さない。

王子王女は、每晚ナイル河岸の、静かな涼しい家に會して、日々の研究を語るのてあつた。或る夕の事、王子は流の上下を眺めながら、「八十個國を流れ来る汝ナイルの大河よ。汝が湧き出でたる國、アビシニヤの王女に教へよ。汝の進む途中に、怨、悲、猜の聲の無い家が一つなりと有つたかを。」と歎いた。

實に二人は失望せざるを得なかつた。貴さも賤しきも共に樂しき家庭にあ

らず。王子は思ひ返して、或はネカヤ姫が下級人民を見違へて居るのでは有るまいかとも思ひ、「幸福は高貴の宮殿に棲まず、破れし窓、朽ちし軒の中に坐つて居るのであらう。」と論じたが、王女は決して、偏見誤解は無いと主張した。

偶々イムラクが入つて来て、「殿下等は人生の研究や選擇のみをなさるが、未だ人生の中に生活せられない。それは大きな間違では御座りませぬか。此のカイロは大きな都會であります。四千年前のエジプトは、更に更に大きな又立派な都會を有して居りました。エジプト人の勤勉と聰明との紀念物が澤山有ります。先づ殿下は昔のエジプト人に生れた御心で、それ等の紀念物を御覽なされては如何。偉人偉業の追懐は人をして、新しき希望と愉快とを得せしめます。古代の研究は今の善惡の由來を明かにし、兼て人生の幸不幸を教へます。昔のエジプトは世界文明の母でありまして、其の頃の盛大は今

のヨーロッパも及ばなかつたのであります。之を考へては誰か奮ひ起たない者が有りませう。幸ひ近くに金字塔が有りますから、明日早速、其の見物に御出發なされては如何。四千年の風雨に曝されて、嶄然と立つて居る大三角塔、必ず何等かの尊い教を傳へることと存じまする。』

六 金字塔の研究—腰元ベクアの變事

イムラクの金字塔見物の勸めに従ひ、出發の相談が定まつた。翌日王子は、妹ネカヤ姫やイムラクは勿論、姫の腰元ベクア其他、ベクアの使ふ婢共及び多くの人夫をも引きつれ、天幕を駱駝に積んで出立した。

金字塔は甚だ大きい。底邊は四角であるが、側面から見ると三角形で、丁度三角の板を四方から合せた様である。此の様な塔が諸方に澤山ある。何れも皆今を去る凡そ四千六百年前から其の後六百年ばかりの間に、代々のエヂ

プト王が、生前に豫め建て、置いた墓である。ナイル河の西の岸メンフィスと云ふ都會の近傍にばかりでも、七十餘箇所ある。最も大きいのはギゼーといふ處のもので、三箇ある。其の中最も大きなのは、高さ四十五丈、底の一邊が七十七丈、底面積は實に世界の他の最大建物の底面積の二倍である。王子等は何れの金字塔を見に行つただらう。多分ギゼーの大金字塔であらう。野を過ぎて近くに從ひ、次第に其の壯大に驚いたと云ふことである。イムラクは教へた、「これは昔のエヂプト王の墓であります。如何に王の權威が強かつたかは、之を見れば、解りませう。金字塔は大抵大きな岩の有る處を求めて、其の上に建てたのです。東には寺を造り、禮拜の出来る様にしたのですが、今は寺は有りません。』

王子等は漸く塔の下に來た。先づ西の方に廻つた。西の方の側面に門の様

る。それから北に廻つた。此處には塔の中に入る口が二つある。中に入るのは歸路にしやうと、王子等は塔の上に登つた。塔は大石を以て築き上げたもので、大きな階段になつて居る。地面と凡そ五十度の角度を爲して居る。登つて行く途中で、イムラクは、一個で千六百噸以上も貫目の有る大石を四つ五つ指しながら、『是等の石は數百里の遠方から、樞の様なものに乗せて、長い間かゝつて運んで來たのです。中にも此れは二千人の人夫が三年かゝつて、此處迄運んだのです。』などと説明して聞かせた。

王子等は且つ驚き、且つ異んで、高い頂に達し、其處から遠い沙漠を眺め、人間の力の大きいのに感じた。やがて降つて、愈々塔の中に入つて四年の秘密を探らうとした。入口は二つある。一つは側面の石の間の門である。一つは地面に岩を穿つて、降りて行く様になつて居る。此の穴の奥にエヂプト王の棺が納めて有るのだ。

イムラク曰く、『昔エヂプトの人々は、死後魂が還つて來るものと信じて居ました。其れ故種々工夫をして、死んだ體も朽ちぬ様に、木乃伊にして棺に入れ、其の棺を此の様な、大きな墓に納めて置いたのです。魂が其の木乃伊に還るのを待つたのでありませう。』

穴の中に入らうとすると、ベクアは怖れて従はない。『必ず幽霊が出て、出口を塞いでしまつてせう。私に行けと仰有るのは死ねと仰有るのです。』と言つて戦へて居る。『姫様、私が死なねばなりません。此の様な、恐ろしい窟の中でなくて、外で死なせて下さいまし。』

王子も王女も、繰返して幽霊などは出ないと諭したが、ベクアが聴かない。勇氣は教へて出させることの出來ぬものと見える。ベクアは遂に窟の外に、他の腰元や自身の使ふ婢と共に残ることになつた。

窟は大きな地中の岩を穿つた穴で、左右も上下も岩である。其の奥に行き

着くと、昔の王の棺がある。他に何も無い。イムラクは言うた、「天子でも死ぬことが有るから、此の様な心配をして、墓など建てるのである。天子は幸福ばかりと思ふ者は、來つて此の塔を見るが宜しい。」

人々は窟から出て來た。王女はベクアに暗い窟の中の事を語り、幽霊らしい者も出なかつたと話して、楽しく笑はうと思つたが、出て見ると、何事の起つたのであらう、人夫共は驚いた様子をして居る、腰元共は泣いて居る。一人の人夫が語り出した、「殿下が穴にお入りになると間もなく、一隊のアラビア人が來て、突然攻撃しました。戦ふにも味方は無勢です。逃げるには遅過ぎました。その中敵は吾等を捕へて駱駝に積んで走り去らうとします。幸にもトルコの騎兵が近いたので、ベクアと其の婢女二人だけを攫つて逃げました。直にトルコ騎兵に頼んで追撃して貰ひました。」

王女はあまりの驚愕に卒倒してしまつた。王子は劍を執つて走り出さうとした。

イムラクは之を押し止め、「お待ちなされ。アラビア人は駿馬に乗つて居ります。味方には荷馬が有るばかりです。今から吾々が追つても、ベクアは獲られませぬ。其の上ネカヤ姫が又危う御座います。」

暫くして、トルコ騎兵は敵に追ひ付き得ないで歸つて來た。イムラクは言うた、「これは却て幸である。トルコ人が追ひ付いたら、アラビア人はベクア等を殺したかも知れない。」

七 ベクアの行方

王子等は已むを得ず、ベクアを捨て、カイロに遠つた。途中種々の方法を相談したが、誰も良い策を考へた人が無い。王女の落膽は非常なもので、

自身の室に引籠つて泣いて居つた。腰元共が、入り代り立ち代つて慰めた。ベクアは今迄に、多くの幸福を得た事、人間の運命は、海淵の消えがちなもの、ベクアの如きも、斯る運命の手に弄されたに過ぎぬ事、王女は間もなくベクアの様な親しい友を得べき事、など繰返して説いた。然し侍女共は表面だけ悲しさうなので、内心では深く悲んで居るのではない。王女は少しも慰められなかつた。

王子はトルコ副王(統監)に上申して、悪人を捕へベクアを取り戻す様に願つた。副王は大に悪人の行爲を怒り、直に捕へてやると言うたが、それは表面の伴りて、少しも捕縛の方法を考へなかつた。

イムラクは王子と相談して多数の探偵を備ひ、諸方に遣はして、ベクアを捜させた。皆成功しない。はや二個月も夢の間に過ぎ去つた。王女等は益々悲むのであつた。

王女は、あの時無理にもベクアを伴つて窟に入れば良かった、残して置いたから悪かつたと云ふ事を繰返しては泣いた。其の度毎に、イムラクは慰めて、『王女よ。貴女がベクアを残しなかつたのは、ベクアの恐れるのを憐んだので、實に仁愛の徳に富んだ爲であります。貴女に何も罪は有りません。』

王女は稍や悟つたけれども、ベクアを失うた悲みは消えない。再會の期しがたさを思うては、日々涙にかきくれた。王子は之を慰むるに苦心し、或は音楽家を備ひ、或は技藝の師を頼み、頻りに王女の心を之に轉じさせやうとしたが効が無い。イムラクは又毎日ベクアの搜索に奔走するが、成功の緒も握り得ない。

王女一日イムラクを召して曰く、『イムラクよ、長い間お骨折りであつた。もう自分は望を捨て、ベクアの事を忘れやう。悪人共の多い此の世を避け、人里遠い山中に、墨染の尼になつて、慾を絶ち心を安んじて一生を終らう。』

永く浮世に住んで、世間の罪悪や争闘を見聞すると、倍々ペクアの性質の質朴、従順、貞淑なのが戀しくなるから……』

イムラクは静かに教へて言ふやう、『王女よ、ペクアといふ一つの樂みが失せたからとて、今有つて居らるゝ他の樂みをも御捨てなさるとは道理とも思はれません。山中に隠退閑居するのは、果して徳を進め、人を幸福にするものでせうか。彼のナイルの岸の隠者の後悔談を思ひ起しなされ。全くペクアの事を忘れたら、再び此の世に還りたくありません。凡そ世間の有爲轉變に馴れぬ者の、初めて災難に逢うた時には、夜は長へに夜のやうに思つて、照々たる朝光の、再び来るを忘れるのです。月が曇れば、月は無いものと思ひ、眼も心も忽ち愁雲に蔽はれて、やがて雲霧れ清光の照ることを忘れるのです。此の人世の大海に、帆を上げて馳せても見給へかし。刻一刻、吾が後に捨て行く島や船は、刻一刻、小さくなつて消えてしまひます。一步一步、

近いて来る前途の望は、一步一步、大きくなつて來ます。背後の小さいものを捨て、前に懸れる大きいものをお取りなされ。既往は追ふも及ばず。之に執着して居らるゝは沈滞の始で、沈滞は腐敗退歩罪惡の根元であります。常に望と活動とを新にして、沈滞せぬ様になされませ。新に親しい友人も出來ませう。』

斯くてイムラクは、尙ほ一年だけと言つて、王女の退隱を延期させた。其の内には王女の心も引立つならんと思つたからである。

後七個月を経て、エチプト南方のヌビアから歸つて來た使者が有る。其の報告に依ると、ペクアはアラビアの酋長の所に囚へられて居るとの事である。此の酋長はエチプトの國境に近く城を構へて居るので、金二百兩出せば、ペクアと其の婢女二人を還すと言つて居るとの事であつた。

此れは餘り高價でもないから、ネカヤは王子に願つて、直にベクアを受取る使者を遣はさうとした、ラセラスは更にイムラクに相談すると、イムラク曰く、「輕々しく金を送つては、途中で使者に逃げられたり、或は先方で只取られてしまう。それに此方から出て行けば捕虜にされるかも知れず、又アラビア人はトルコ副王を恐れて、此方へは出て来ますまい。故に先づ使者を遣つて、敵に十人の兵士でベクア等を護衛し、上エヂプトの聖アントニイ寺まで来らせ、此方も亦同じ人數で出發して行き、金とベクアとを交換する様に申させたが宜しう御座います。』

結局此の事はアラビア人も承諾して、ベクア等三人を約束の地に送り來り金と交換した。王女も交換の場所なる聖アントニイ寺迄行つたので、ベクアを見て、夢かとはばかり打ち喜び、相抱いて泣いた。

八 ベクアの物語

王女とベクアとの喜びは、何時盡きやうとも思はれなかつたが、恰も夕食の時、一同寺院の食堂に集まつたから、王子は先づ僧侶や自身や王女の前で、ベクアに遭難後の經歷を語らせた。

ベクア曰く、「初め捕へられて引き行かれる時は、餘りの驚きて生きた心地も有りませんでした。特にトルコ兵に追はれてアラビア人の逃げる時は、恐ろしい早さで、如何な事が起るか心配しました。併し勇氣なきトルコ人は眞の形式ばかりの追撃で退却しましたから、アラビア人も静かになつて、私も樂になりました。けれども體軀の苦痛が減ずると、心は更に苦しくなりまして、それから行先が心配で堪りません。それに三人別々に引き離されて、遠方から顔を見合はすばかりですから、其の淋しさ一通りではありません。

併し無益に敵を怒らせるは悪いから、静かにして居りました。其の一日、無人の沙漠を過ぎ、月の中空に昇つた頃、或る岡の麓に着きました。

此處に天幕が有つて、守兵が燈火を點けて隊長の歸りを待つて居ました。私共も廣い幕の中に迎へられて、兎に角夜食を致しました。多くの婦人達が夫の遠征に従つて來て居りましたが、寢る時、私の婢女共が私の上衣を脱がせなどするのを見て居ります。私が大切に取扱はれるのを驚いて居る様子で御座いましたが、一人の婦人は私の上衣の美しいのを珍しさに、恐るゝ手を伸ばして、其の刺繡に觸れ、急に室を去つて、他の貴い婦人を呼んで來ました。其の婦人は、大層権力のある人の様でしたが、私に挨拶し、やさしく手を引いて、前よりも小さく美しい幕の中に導き、婢女共と一緒に美しい毛氈の中に眠らせました。

翌朝私は牧草の上に坐つて居りますと、昨日の隊長が來まして恭しく

禮をなし、私を貴い王女であると言ひますから、いや尋常の旅人で、此の國を早く立ち去らうとする時に、捕へられた不幸な者ですと答へますと、否々必定王女だと言うて承知しません。衣裳が美しいから王女である、早く金を償へば赦して還へすと申します。それで私も前より安心致しました。アラピア人は金が欲しいのであるから、金を出せば満足するに相違ない、そして殿下は必ず金を出して下さるであらう。斯う思つて大層安心致しました。それからアラピアの婦人達は、先を争うて私に仕へて呉れます。婦女共にも仕へます。前よりも楽しくなりました。三四日彼等と旅行を續けましたが、左程苦しくは有りませんでした。四日目に隊長は、私の償金は二百兩だと申しますから、取扱ひを善くして呉れば、尙ほ五十兩加へても可いと申しました。私も今迄は金の魔力を知りませんでした。此の時から金を欲する者には金は無上の力あることを悟りました。

此の後は私も一軍隊の隊長で、毎日の旅行も私の命令の通り、進むも休むも勝手でありました。数週間進んで、遂に隊長の館に着いたので御座います。石を疊んで造つた廣い堅固なもので、ナイル河の傍に在ります。隊長は私に暫く此の家で旅の疲勞を慰めよと申して、私を美しい奥の室に導いて、鄭重に待遇しました。

私もはや放免されて王女に再會する時も近いと察しましたから、喜びも新になつて楽しい數日を送りました。地は僻遠でありますが高樓に登つて見ますれば、眼下にはナイルの流のうね／＼と北に走る有り、遙かに霞の包んだあたりに、王女様も居られるであらうなどと考へました。アラビア人は戰爭を事として居る爲め、退いても敵に追はれる事のない、此の様な地に住居に選んだのでせう。淋しい處で、別段の楽しみも有りませぬが、又左程の悲しみもありません。土地珍しい私に取りましては可也面白く、晝の間は河馬

や鱈、其の他奇妙な草の花などを見て心を慰めました。夜はアラビア人に案内されて、高い樓に登り、星の名や其の運行の道などを聞きました。別に興味も有りませんでしたが、餘りに王女様が戀しいので、それを忘れる爲め、強いて星の研究を致したことも御座います。

アラビア婦人とも遊びましたが、彼等は生れて以來其の狭い土地に住み、學問もしませんから、眼に見る事より外の智慧少く、談話しても面白からず、遊戯も子供らしいものでした。婦人達は私を大學者と思ひ、又王女とも思はれて居りますから、仲間同士の喧嘩は一々私の裁判を求めました。私は常に公平に判決してやりました。時には其の訴が餘り愚かしいので笑ひ度くなることも有りました。

アラビアの婦人は美しくありますが、學問や智慧に乏しい爲め、卑しく思はれます。道傍の花の美しくても、香が無い様なものでありませう。無心に

人に摘まれて、無心に捨てられる花であります。尊敬する價値は有りません。常に裁縫をして居りますので、私共も手傳をした事も御座います。

然るに隊長は次第に私を選へす氣を減じまして、私が王子様へ償金の通知を出して呉れと頼みましても聽きません。度々頼みますと、遠征に出て、私に家の留守番をさせたりしますから、私は若し殿下がカイロからアビシニヤに御歸國になつたなら、此の身は一生敵地に埋まつてしまふのかと思つて心配でありました。幸に殿下の御使者が参りましたし、アラビヤ人も遠征に出ましたけれど多くの金が取れなかつた際でしたから、急に償金を取つて私を還へす氣に成りました。』

ベクアの物語を聞き終つたラセラスは、金百兩をベクアに與へ、ベクアはアラビヤ人の優遇に謝する爲め、約束の通り其の半額五十兩を送つて遣つた。

九 天文學者の研究

一同はアントニイ寺から、打ち連れ立つて無事にカイロに歸つた。王子は此頃漸く學問といふことに趣味を感じ、今から學問を研究して一生を終らうと思つた。此の事をイムラクに相談すると、彼は其の平生交つて居る天文學者の身の上を語り出した。

「殿下よ。學者も面白う御座いますが、學者必ずしも幸福なものでは有りません。人間の幸福は、人間の精神の内に在ります。學者でも安心の無い不幸な者が御座います。私は唯今天下第一と稱へらるゝ、天文學者の宅から歸りました。其の人は既に四十年も、専ら天文觀測に従事して居る學者で、妻も子も親戚も無く、晝夜其の精神を天外無限の遠方に注ぎ、大真理の發見に勉めて居ます。其の樂みとする所は、毎月一回三四人の親友を集めて、共に語

り、又自ら發見した眞理を告げて悦ぶに過ぎません。それ故次第に地上の事を忘れて、天上の人の様に成ります。私が旅行談などしますと、半ば忘れ掛けた此の世の事を思ひ起すとて、非常に喜んで聞きます。私は地上の實際社會の事を以て學者を樂ましめ、學者は又高遠な天上の學理を以て私を益します。此の人は威有つて猛からず、禮儀あつて信實あり、學深くして誇らず、實に好ましい人であります。私は屢ば其の人の幸福を祝しました。然し學者は何か不足な不安な様子が有りますから、怪んだのです。彼は談話の途中などて、時々太陽を見て嘆息を漏し、或は私の歸るを呼び止め、何事か言はうとして、而も中止します。

或る夜の事、私は學者と天文臺に登つて月の出るのを待つて居ました。折悪しく黒雲天を閉して、闇は益々深くなります。學者は突然言ひますには、

『イムラクよ。自分は貴殿を信ずる。知識あれども誠なき者は信じ難く、誠あれども知識なき者は頼み難し。貴殿は長く相交つた結果、誠ある智者たることを明かにした。自分はやがて他界の人となるべき老人であるから、何卒貴殿に死後の事を依托したいものである』と申しました。

學者は尙ほ續けて言ひますには、『凡そ天文學者は、天の星や雲を見たばかりでは不可。宜しく天候を調べ、四季を順にし、風雨を和し、或は五穀を稔らしめ、或は砂漠の緑地を養ひ濕地の水を減ずる工夫をせねばならぬ。尙ほ時には太陽の位置を變じ、地球の軸や軌道を動かす必要もあるべく、時には彗星の近づくを防ぐ工夫もせねばならぬ。自分は此の望を抱いてから、前日の樂みを失ひ、毎日唯斯くの如き天文學者の大責任を全うし得ざるを苦慮した。私かに貴殿を見るに、賢徳知見、吾が大事業を托するに足る人物である。何卒此の天文臺を管理し、吾が志を繼いで日月の整理者となつて給はれ。』

と申します。私も其の信任を光榮と思つて、兎に角承諾の旨を答へますと、如何にも安心したらしく感謝の意を表はしました。前に幾度も私に語り掛けて中止したのは多分此の事であつたのでせう。』

王子は謹んで傾聴して居つた。王女とベクアとは笑ひを押へ兼ねて居た。つまりらぬ事に學者が苦心すると思つたのであらう。イムラクは之を押し止めて、『斯くの如き學者の苦心を笑ひ給ふな。なか／＼に吾々の想像も及ばぬ高尚な心から起る苦痛であります。之を知らずして、彼等の苦心を愚かしい事のやうに思ふのは間違つて居ります。』

王女とベクアとは、イムラクの談話を聞いて、急に天文學者が見たくなつた。然し其の學者はヨーロッパの學者の様でない。女といふと逢はない。そこで種々考案を凝してイムラクに語り、學者の所に伴つて行つて呉れと頼んだ。

だ。

遠方の旅人で不幸な者だと言つたらば、女でも逢つて談話をして呉れるかも知れぬ、特に其の人は慈悲の徳の高い人だといふからなど考へた。之にはラセラス王子大に反對した。曰く、『事の大小に係らず、人を欺くといふ事は、惡の最大なるものである。又其の様な虚構は度々行ふことが出来ぬから、長く學者の談話を聴きに行くことが出来ぬ。』

苦心慘憺の結果、腰元ベクアは思ひ付いた。『吾等は正直に實際を語つて願ふより外に道がない。曾てアラビア人に捕へられて其の岩に住んだ時、隊長は毎夜高い樓に登つて星の見方を教へて、自分をアラビア人にしやうとした。其の時の學問を是れから續けたなら面白いてあらう。王女殿下は自分の學友であると言つて、共に行くは差支へ有るまい。』そこで此の事をイムラクに語つた。

イムラクは學者を訪ねて言うた。『遠國の大王の姫君、當地に留學して居る者が、先生の大學者にして賢徳高さを聞いて、門人になりたいと申します。何分御願ひ致します。』

學者は之を聞いて、それは珍しい婦人も有れば有るもの、甚だ殊勝なり、急ぎ連れて来て呉れと返辭したので、王女とベクアは、特に美しく着飾つて、イムラクに案内されて學者を訪ねた。學者はネカヤ等の美しい姿を喜び、又ベクアのアラビア人に學んだ天文學の知識深さを感じ、益々勉強せよなど勵ました。

王女等は其の後屢ば學者を訪ねて其の教を聴き、益々其の徳性學識の勝れしを知つた。或る日遂にイムラクの家に學者を招待した。學者は茲に世間の楽しい事を悟つて、喜んで王子等と會合し談話するに至つた。王子等は此の學者を信じ其の教に従ふのが幸福を得る所以と思ひ、極樂の谷を去つて、カ

イロに来れる以來の事實を告げ、且つ處世の法を教へられんことを願うた。

學者は言うた。『人世の幸福を選択するは至難の事ぢや。あらゆる人生の狀態を研究せねば解るまい。愚者は唯自分が天文學者になつたのは、自分の幸福でなかつたといふ事を知つて居るばかりである。此の世に用も無く人間に益少く學問の爲に尊い一生の月日を空費した様な感がある。つまり人間の萬樂を捨て、唯一つの天文學を求めたと云ふものぢや。』

イムラクは傍から言うた。『先生、少しも悲しむ所は有りません。徒らに益なき後悔に馳せ給ふ勿れ。空しき樂みを思ひ給ふ可からず。よし困難であつても、日月の整理者たる職分を御盡しなされ。億兆民人の爲め、其の高い志を捨て給ふな。』

學者曰く、『それは一刻も忘れてはならぬ事である。我が過去は交る者も少く、苦樂を共にする者が無かつたが、斯く諸君と相知つては、憂を忘れる事

が出来来る。洵に愛する人の有る身は幸である。我が今後は定めし平穩無事、泰平の春の様であらう。』

これを聞く者、此の學者の學と徳とを考へて、誰か反對する者が有らうぞ。

十 老人と死との研究

或る夜の事で有つた、王子王女はベクア、イムラクを連れてナイルの堤を散歩した。流に映る月の影を追うて良夜を楽しんだ。偶ま白髮の老翁に逢つた。これは王子が學者の會で見たことの有る人である。やがて老人は王子の招待を喜んで王子の邸に來た。饗應の最中に王女は老人に聞いた。『學問深く、又年老いて種々の經驗に富んだ人は、散歩の間にも、星を思ひ水を觀じて、常人の及ばぬ樂みが有るて御座いませう。』

老人「否とよ、樂みは少年の時が最も多い。少年の望は春の海の如く、前途洋々として際涯も無い。年老いては見る所の萬物、すべて一たび眼に觸れしものばかり、而も見んと欲する親戚朋友は既に世を辭して身邊に在らず。誰の爲にか力め、誰の爲にか勵まうぞ。仰いては月の盈虚に諸行の無常を觀じ、俯してはナイルの流に逝くものの復た還り難きを歎ずるに過ぎぬ。樂みは少年のうちに限る。少年の貴いのを忘れてはならぬ。』

一同は老人の物語に失望した。人間老いては樂みなし、然らば吾が老いて行く先にも望の無い事になる。其れにつけても、昔エヂプトの貴人が木乃伊になつたのは何故であらう。老いて珍しいものなくとも、死んで珍しい幸福の國が有るのかも知れぬ。など、死といふ問題に就いて考へた揚句、エヂプト人の墓を見物しやうといふ相談になつて、天文學者、イムラク等も連れ立

つて出かけて往つた。

墓は金字塔内の窟の様な地中の穴倉である。エヂプト人は身體完全ならば靈魂が還つて來ると信じた爲め、貴人は非常な工夫を凝して、死後己の體軀を木乃伊に造らすやうにした。今日の學問でも其の造り方を知ることが出来ない。此の木乃伊が墓の中に列を爲して並んで居る。天文學者は之を見て人間の靈は物質に在るのかも知れないと言ひ、イムラクは物質と精神とは異なる、精神は神の造つたもので滅びないものだと言ひ、墓の中で議論が盛んで有つた。

王子、王女、ベクア、ベクアも此の時は前の様に窟の外には居らなかつた。皆此の兩學者の説を聞いて居た。結局何れの説にしても人間の靈は決して滅びることがない、物質と共に分散しても物質が滅びないから精神も消えない、物質とは別れて存在するとしても、不滅に異なる所はないといふことに歸

着した。

議論も漸く止んで墓の中が森としたので、ラセラスは思ひ出した様に、『さ一同歸らうてはないか。兎に角我々は死ぬことがない。生命は死ぬことも有らうが、精神は死なぬ。今日考へるは永久に考へるもの、今日働くは萬世に働くのである。此の墓中の人々、曾ては四千年前に、我々の半生と同様醒甦として人世の幸福を選択し、而も何を事業として働く可きかが解らぬ中に、死の手に捕へられたのであらう。吾人に於ては處世の選擇既に用なし、一刻も早く不滅の道に勉勵せねばならぬ。怠惰は罪惡の根源である。』

イムラクは王子が將に人生幸福の真相を觀破せんとするを喜び、カイロに歸る途上で語つた、『實に閑居無事に生活するは不幸の原因で有ります。精神を外界の事業に向けねば、心は樂みを内に求める。従つて未だ所有せざるものを得んとします。即ち遂げ難き空望を抱いて、今日の尊貴を忘れ、明日の

來ぬ間を樂しむ。是れは實に虛無の事を妄想して、欲望の心を樂しましむるに過ぎません。従つて眞の知の働さを妨げるから、初めは愚かしく見えたものも、遂に迷からして愚ならずと見える様になります。畢竟目前の勉勵活動を忘れ、精神を遊ばせるからであります。』

十一 歸國

王子等はカイロに歸つた。今や王子も王女もペクアも、皆自己の空想に耽つた過を悟つた。勤勉は幸福の道で又善徳の母であると知つた。ペクアはネカヤ姫の宮殿を天國の様な土地に建てやうなどいふ空想を捨て、ネカヤ自身は又牧羊を生涯の業として、其の平穩を樂まんなどといふ望を去つた。更に王子は自己の父兄に代つて國を治め、大徳を天下に布かんなどいふ空想の夢から覺めた。

貴賤貧富老幼男女を問はず、勤勉の在る處に幸福は存する。處世の選擇は難問題ではない。そこでペクアは彼の聖アントニイ寺に、清淨な乙女達を集めて、これを養ひこれを教へんことを願つた。王女は女子の學校を建て、諸々の學問を教へ、仁愛節操の鑑とならんとし、王子は大國を治むることは難ければ、先づ一小王國を建設し、躬自ら法律を布き、訴を聴き、直接に政府の各省を監督しやうと決心した。天文學者とイムラクは、其の深く悟つた人生自然の理法を本として、平穩に老後を送らうと云ふのである。王子等の望は右の如し。而も尙ほ或は遂げられないだらうかと心配して、成るべく成功に近いものを求め、アビシニヤに歸つて實行しやうと決定した。

少年諸君。諸君は實に前途の望に満ちて居る。然し今日學ばずとも明日有りと思ふこと勿れ。年老いて後悔する時が無いとも限らぬ。ラセラス王子は

富貴の家に生れ、安樂な生活を送つた。極樂の谷に於て自分の不足を知ることが出来ぬのが、何よりも不足であると言ふ身分であつた。而も王子は極樂の谷に居るを幸福とは思はなかつた。世間の實際を研究して見やうと決心し、出奔の望を抱いてから愉快になつた。そして留學勉強中は更に愉快であつた。萬事足りて幸福に過ぎた人は却て不幸である。不足有つて求むる所ある者は幸である。身富貴に生れて爲す業の無い者は、高尚な大事業に進む様に身自らを鞭撻せよ。又貧賤の家に生れて不自由の間に育つ者は、必ずしも其の貧困を自己の不幸と悲しむに及ばぬ。

思ふに人間の心身は、一刻も静止することを好まぬものである。何等かの仕事を求めて、其の活動性を満足させやうとするものである。然るに若し初めから自己の身の上の些少の不足も無かつたならば、如何にして満足の愉快を味ふ事が出来やう。不足あり制限あり缺陷あり艱難災禍あるが故に、人

は無限と完全とを慕うて奮起する。常に新しい希望に向つて活動の楫を操り、満足の岸に到るの愉快を得る。造化は實に人間に不完の才能と不備の境遇とを與へ、同時に又完全に憧るゝ性情を賦へたのである。此の故に不撓不屈の精神を以て、努力して息まざる者は、奮闘後の満足の、類ひなく甘い味を知る事が出来る。洵に勤勉は幸福の母である。不幸を歎ち、徒らに痛む者、先づ働く可し。満足は不足の根に生ずる。苦痛災禍は恩寵である。働く者に取つては宇宙は全善、自然は完美、人生は光明、日々是れ好日、天地長への春である。

ラセラス王子物語(終)

附 録

ラセラス傳に就いて

大 風

一 ラセラス傳を著した文學者

てい説に傳スラセラ

今から百五十年ばかり昔、英國にジョンソン博士といふ大學者が有つた。詳しく言へば其の誕生は西洋紀元の千七百〇九年で、死んだのは千七百八十四年である。明治四十二年は西洋紀元の千九百〇九年であるから、今から丁度二百年前に生れたのである。其の頃日本には徳川の五代將軍綱吉が居つて、白井白石、貝原益軒などいふ、ジョンソン博士にも負けない大學者が有つたのである。

(89)

ジョンソン博士、名はサムエルと云つた。體格の大きい、顔の恐ろしい、剛情な氣質の人であつた。而も若い時から病身で大へん難儀をしました。其の難儀の中にも、色々勉強をして、其の頃イギリスに無かつた立派な英語の字引を作りました。『英國大辭書』と云つて、實に八年も苦んで出来たのです。

ジョンソンは此の字引を作つて、世間から大學者であると感心されましたが、まだなか／＼金持には成れませんでした。千七百五十九年、博士が五十歳の時、博士の母上が丁度九十歳で死亡しました。貧乏で母の葬式をするお金が有りません。そこで夜の間だけ本氣で書物を書いて、僅か一週間で作り上げ、其の書物を賣出すと、忽ち喝采を博して多くの人に讀まれ、母の葬式の費用をも拂う事が出来たといふことである。

其の書物の名は、『アビシニヤ國の王子ラセラ話メの』(The History of Ros-

selas, Prince of Abyssinia.)と云ひます。これは一つの小説で全くジョンソン博士が工夫して作り出したのであります。博士は王子の身の上にかこつけて、六かしい議論を世の人に示したのに過ぎない。ですから中には道徳と云うて修身の話や、人生觀などいふ世態の話なども有ります。茲には少年少女諸君に餘り六かしい様な所を省いて、ラセラ王子の苦んだり喜んだりする身の上話だけ書いたのです。

二 今のアビシニヤ國

ラセラ王子の話をした序に、少々ばかり王子の生れた國の話をして置きます。世界地理を學んだ人は御存じてせう。アフリカ洲の地圖を開いて見ると、其の右の方、即ち東の角の方にアビシニヤといふ國がある。彼の金字塔やナイルといふ大きな河があるので有名なエチプトは其の西北の隣であ

る。アビシニヤ人は多くエシオビヤ人種であるから、自らはエシオビヤ國と云うて居る。

今のアビシニヤは、面積が日本程有つて、なかなか廣い。併し人口は凡そ五百萬位であるから日本の十分の一に過ぎない。元來アフリカ洲は大抵ヨーロッパ人が、別けて取つてしまつたが、此の國ばかりは太古から一個の獨立國として、いつも自國の王様の支配を受けて居る。時には種々の事件も起つて、王様の家が代つたことも有るが、兎に角未だ外國人の領地にはならぬ。今の王様はメネレク二世と云うて西洋紀元一千八百八十九年に王位を嗣がれた方で、甚だ勇氣の有る王様である。一八九六年にはイタリヤの陸軍と戦つて、大勝利を得た程である。

土地は熱帯に屬するが、氣候は割合に溫和な處である。健康に適して居る。毎年十月から翌年二月迄が寒い季節で、三月から七月迄を暑い季節とする。

暑いと云うても、新鮮な涼しい風が有つて、夏を凌ぎ易くする。八月九月は雨期と云うて、毎日曇り勝ちて雨も多く、彼の有名なエチプトのナイル河の水を増すのである。併し困るほど大雨も降らず、温度も日本の秋の涼しさ位で、快いとこの事である。

地圖でも解る通り、國中山ばかりで、一體に高臺の國である。特に國の東の方には、北から南へと進む山脈が有る。併し其の山脈は善く連続しては居らず、断々である。中には一万五千フィートのもの、即ち富士山や新高山よりも高いのがある。又國の西の方にも中央にも山岳が多い。

土地が熱帯で、而も高山など頂上の寒い處も有る爲に、種々珍しい動植物に富んで居る。日本では見られないものも多い。高山の上には、イギリスあたりで出来る様な植物があり、低き丘陵の上には日本などの温帯に繁るやうな喬木灌木が繁つて居る。國の北部は少々荒れて居るが、中央から南部は、

頗る肥えて居て、一年に米や麥を三度も收穫する。コーヒー、葡萄、甘蔗、棗、密柑、橙、レモン、バナナ、柘榴などいふ物、到る處に産し、木綿も多く取れる。又香氣の高い薬用の植物なども少くない。家畜も澤山ある。其の中牛は取りわけ有名で、四尺以上の長さの角を有つたのも有る。山羊も二尺位の角を有して居る。馬は強く勇しく、羊の毛は美しい。

野獸では、犬の類で狼に似た、鬣の長い猛獸が多く、野や山に群を爲して徘徊して居るばかりでなく、時には、町や村、人間の家にさへ入り込んで来る。随分恐ろしい。象も犀も多い。犀の皮には皺や縐の多いものであるが此の國の犀の皮には全く無い。昔は戦争に使ふ盾を張つた。又酒盃の中に張ると毒を飲んでも中らないと云うて、今も張るといふ事である。其他鱈、河馬、ライオン、水牛、豹など珍しからず、羚羊、野猪、猿、兔、木鼠、狸、

山狗の類も居る。

鳥類も頗る多数で、其の羽毛の色が甚だ美しい。鶯、鷹、兀鷹、鸚鵡、鴨、燕、鶉の類も多く、又到る處に蜜蜂が居つて、其の蜜は國人の食物として毎日用ひられる。害を爲すものでは蝗蟲を第一とする。蝗蟲の害は、なか／＼恐ろしい。蛇は餘り多数ではないが、二三種類の毒蛇も居る。

アビシニヤ全國は四つの大きな州と、數多の小さい州とに別れて居る。其の内、中央の大きい州をアムハラと云ふ。此の州の東と西とは、前に述べた山脈に圍まれ、又南にも北にも山が有る。だから國中第一の山地で、四方に屏風を立てた様である。而も屏風の中に、又あちらこちらと山岳が起伏して居る。此等山々に圍まれて、一つの湖水が有る。デンピア湖又はツァーナ湖と云ふ。直径二十二里(日本の)で、これから青ナイルといふ河が出て、エチプトを流れる大ナイル河の中に注ぐ。湖水面は海面から五千七百フィート高

い。水と山、清い空と、繁つた林と、風景の美しい處である。

以上は今のアビシニヤの事であるが、ジョンソン博士の話されたラセラス王子は、此のアムハラ州の山地に居つたのである。今とジョンソン博士の頃と、時代は異つて居るが、自然の景色には大なる違ひも有るまい。博士が此の小説を工夫するに、殊更に此の土地を舞臺にしたのは、鳥獸草木、風景など、以上の様に面白いものが有るからであらう。

(終)

明治四十二年十二月一日印刷

明治四十二年十二月五日發行

ラセラス王子物語

定價金貳拾錢

著作者 坂本榮吉

發行者 山縣文夫

東京府下北豐島郡東葛町大字上駒込十九番地

印刷者 藤本兼吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社秀英舎第一工場

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地



發行所

東京巢鴨町上駒込字傳中廿番地
電話(長距離加入)下谷四百三十八番

内外出版協會

(振替貯金口座東京三百五十五番)

日曜學校の先生は此書物を讀んで生徒に御座かせなさい

百島 冷泉 譯編

通俗文庫

各册定價 金貳拾錢 郵税二錢宛

サンデー、イブニング、日曜日に讀ませる書物には必ず此書を御座かせなさい

『通俗文庫』は世界で有名な善い書物を選んで、其梗概を平易に面白く譯述したもので、出版する毎に家庭、學校、少年會等に歡迎せられて、各編版を重ねぬのはありません。

- (第一編) **天路歷程** (The Pilgrim's Progress) 邦訳
- (第二編) **奴隸トム** (Tom Sawyer) ストウ夫人の
- (第三編) **聖書物語** (The Bible Stories)
- (第四編) **赤靴物語** (The Red Shoes) アンデルセンの
- (第五編) **二人巡禮** (Two Pilgrims) トルソの
- (第六編) **漂流記** (Robinson Crusoe) ロビンソンの
- (第七編) **伊ソップ物語** (Aesop's Fables) イソップの
- (第八編) **シェイクスピア物語** (Tales from Shakespeare) シェイクスピアの

版元 東洋堂 東京 芝罘 漢口 烟台 濟南 青島 天津 北京 上海 漢口 烟台 濟南 青島 天津 北京 上海

著原ンドルエシ 譯吉百八崎宮

舊約聖書物語

—(錢六稅郵 錢拾六金價定)—

最も平易に最も精しく最も興味多き聖書物語

舊約聖書を姑く一の文學的著作として見るときは、世界に屈指の興味豊富なる物語である。文學者の著作に超絶した大文學である。されば普通人は頭初から、聖書など云ふものは難解しいばかりで面白味の無い西洋の經文だらゝに考へて讀まうとしないが、實は少く文學を解する者が之を讀いた日には、其の興味の豊富なるを尋常小説の類でなく、殆んど耽讀といふくらゐに面白く讀まれるのである。舊約聖書と新約聖書とは、共に歐米の文明と文學との源泉であるが、之を讀する興味に於ては舊約聖書の方が殊に優つて居る。何となれば新約聖書は基督一人の事蹟に就いて記した書であるが、舊約聖書は天地創造の初めから、多くの傑出者、偉人の事蹟に就いて記した書であるからである。人生れて文學を解しながら聖書を讀まないで居るのは、當人の一大損失である。本書の原書は米國に於て普通讀者の爲めに著はされ、多くの部數を發賣した有名な書であるが、今之を宮崎湖成子の勞に依つて新刊するに至つた。未だ聖書の內容を知らない人は、大人と少年とを問はず速に一讀あらんことをお勧めする。

版元 東洋堂 東京 芝罘 漢口 烟台 濟南 青島 天津 北京 上海 漢口 烟台 濟南 青島 天津 北京 上海

譯 邦 木 々 佐

いたづら小僧日記

いたづら小僧の面目其の儘に現はれ縦横無盡のいたづらは如何なる人を腹を抱へて笑はしむ譯文亦頗る巧妙………(國民新聞評)

夏目氏の『猫』と同工異曲なるもの本社が此の書の寄贈を受けたのは二三週間以前なるが面白しとして甲から乙に乙から丙にと行衛不明となる位なり近來の好讀物………(サンデー評)

續いたづら小僧日記

『いたづら小僧日記』は原書の半分程を譯したもので尙ほ譯されぬ他の半分がある、新たに其れを譯して茲に『續いたづら小僧日記』が出来た。滿天下愛讀者諸君の眷遇に報いる積りで、譯者が更に腕にヨリをかけて譯したのであるから面白いことは申すまでもない。これが面白くなければ天下に面白い本はない。

(錢拾參價定) (錢四稅郵)

(錢拾四價定) (錢四稅郵)

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 番五十五百三京東金貯管振 元 版

譯 邦 木 々 佐

おてんば娘日記

『いたづら小僧日記』發行きの盛況は、實際近來の出版界に類が無い。五百部千部と一時に注文する書店も多いので、始終製本が間に合はぬ位である。此の時に於て其の姉妹書たる『おてんば娘日記』が新たに出了。面白さごとく彼と同じく、天下の奇書たること彼に等しく、而も其の限りなき面白味が彼とは全く別様だ。

法螺男爵旅土産

少年少女諸君!!及び少年少女諸君の父母兄弟諸君!!諸君はまだ『法螺男爵旅土産』と云ふ途方もない話のタネ本を御存じあるまい。遠い國へ長い旅行をして戻つた人は、歸來其の見聞談をなすに、往々事實を勝手氣儘に作つて針小棒大の談を眞面目でやる。けれども若し途方もないと云ふことが話を面白くする所以であるならば、彼等の話し様はまだ大に途方も無さが足りないといつてはならぬ。『法螺男爵旅土産』の著者は斯う考へて、其の途方も無い想像を驅つて多くの途方も無い旅行見聞談を作つた。途方も無いこと古今無類である。面白いことも古今無類であるかどうだかは、諸君一讀してのち判断して呉れ給へ。

(錢拾貳價定) (錢四稅郵)

(錢拾參價定) (錢四稅郵)

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 番五十五百三京東金貯管振 元 版

CARLYLE
ON HEROES, HERO-WORSHIP,
AND
THE HEROIC IN HISTORY

解註郎次増田本

カーライル 英雄論詳解

再版

定價金貳拾五錢
郵税二錢

ら者深註原文語の性もるツ中なカ
さの初解文の辨性質の解トのなる！
る見、ばは解を辭、な説論傑識ラ
頁の英正校説詳、カリを一作演「英雄論」
書が文確正に説、其のラ講へ詳マホ
なり學に及し、文イ演た細ホ
りへ研し密ぶ、本辭、演のるなメ
か究て、本、ルのるなメ

本 田
増 次
郎 編

英文詳解

(版 再)
録拾參金價定
錢二 稅 郵

Lord Bacon.
Of Studies.
Of Friendship.
Of Parents and
Children
Of Marriage and
Single Life
Of Love.
Of Envy.
R.W. Emerson.
Friendship
Charles Lamb.
Bachelor's Com-
plaint of the Be-
haviour of Married
People.

原文を掲げ、詳註を載す。難解の句を懇切に
解釋し、名文卓説を興味を以て譯讀せしむ。

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元版
番五十五百三京東金貯替振

DON
QUIXOTE

ドン・キホーテ物語

金 四 拾 錢
郵 稅 四 錢

「いたづら小僧日記」譯者 佐々木邦 譯
西班牙の沙翁とも呼ばれるセルヴァンテスのドン・キホーテは、世界文學の一として何人も一讀せざるべからざる小説なり。本書は即ち同書の縮譯本を和譯したるものにして、口語體の譯文は全く創作の如く見え、此種の翻譯としては上乘のものと思受けらる。近來陸續として出づる怪しげなる大陸小説の翻譯よりも、本書の如きを讀む方遙かに利益と興味あるべし、讀者子の見逃がしてはならぬ新刊なり。
文學士 皆川正禧 譯述 (中外英字新聞)

STORIES
FROM
WAGNER

ワグネル物語

金 六 拾 錢
郵 稅 六 錢

「ワグネル」は羅馬に於ける最後の保民官リエンツを主人公とする悲劇にして、流言に迷はされ易く、恒信の依る所なき多數民衆の爲めに誤られて、一團の猛火に包まれたる政體の露臺の上にて、毅然として、一息まで、國の爲めに盡せる勇士の面目を見るべく、「幽霊船」は魔神の呪詛を受けたる、所謂幽霊船として、類するミスチックなる物語、「歌客タンホイゼ」は「光曲の長」として、王女の急を救ふと、所謂幽霊船として、アンントの聖杯守護の任に膺れるローヘングリンは九篇中の最良長篇にして、「ラインの黄女」は、所謂幽霊船として、破滅の四小篇に分れ、「呪詛の指環」は九篇中の最良長篇にして、「ラインの黄女」は、所謂幽霊船として、人たらしむ。譯者の文章は華麗にして、聊かの滯滞を構へたるもの、神祕多趣、見持つて、好んで、譯といふべし。
新報

會協版出外内 地番十二込駒上町鴨巢京東 元版
番五十五百三京東金貯替振

カボット 原著 日本恒太郎 譯者
日常倫理學 定價金 壹圓 郵稅(小包) 八錢

佐治 實然 著
常識道徳 定價金 壹圓 郵稅(小包) 八錢

西島 玉峰 和譯
通俗論語 定價金 壹圓 郵稅(小包) 八錢

吉川 潤二 耶 譯者
人生の行路 定價金 二圓 拾錢 郵稅(小包) 八錢

吉川 潤二 耶 譯者
人生の實務 定價金 六拾錢 郵稅(小包) 八錢

大原 英次 耶 譯者
人生の福音 定價金 五拾錢 郵稅 四錢

文學士 竹村 修 譯述
人格に於ける養成 定價金 五拾錢 郵稅 四錢

トライ ン 原著 山縣 悌三 耶 譯述
天真の生涯 定價金 參拾錢 郵稅 四錢

河面 仙四 耶 譯者
有用の生涯 定價金 四拾錢 郵稅 四錢

吉川 潤二 耶 譯者
向上的生涯 定價金 六拾錢 郵稅(小包) 八錢

文學士 竹村 修 譯述
青春の佳期 定價金 八拾錢 郵稅(小包) 八錢

前田 定之介 譯者
如何で慰安を求め 定價金 參拾錢 郵稅 四錢

内外出版協會 譯者
修養全書 定價金 二圓 拾錢 郵稅(小包) 八錢

時上 賢造 譯者
理想の紳士 定價金 貳拾五錢 郵稅 二錢

水島 靜處 譯者
人道と天道 定價金 參拾錢 郵稅 四錢

ヘレン・ケラー 原著 文學士 根原 秀峰 譯述
樂天主義 定價金 貳拾五錢 郵稅 四錢

内外出版協會 譯者
廿世紀の武士道 定價金 參拾錢 郵稅 四錢

内外出版協會 譯者
わが青年 定價金 參拾錢 郵稅 四錢

文學士 村上 池洲 譯述
社會の要する少年 定價金 參拾五錢 郵稅 四錢

文學士 森田 繁吉 譯述
ローズヴェルト集 定價金 四拾錢 郵稅 四錢

若宮 卯之助 譯者
座右銘 定價金 四拾錢 郵稅 四錢

對馬 中村 勝山 譯者
日常行為の標準 定價金 貳拾錢 郵稅 二錢

中里 介山 譯者
克己制慾の實例 定價金 貳拾五錢 郵稅 四錢

水島 靜處 譯者
日常生活の勇士 定價金 參拾五錢 郵稅 四錢

フロンツ 大學 校長 原著 若宮 卯之助 譯述
廿世紀の青年告 定價金 參拾錢 郵稅 四錢

内外出版協會 譯者
歐米の新思潮 定價金 四拾錢 郵稅 六錢

文學士 皆川 正 譯述
時勢と青年 定價金 四拾錢 郵稅 四錢

占部 百太郎 著
青年の修養 定價金 貳拾五錢 郵稅 四錢

宮崎 右夫 著
貧乏の朋友 定價金 拾五錢 郵稅 二錢

セイヤ 原著 文學士 若月 保治 譯述
立志の動機 定價金 五拾錢 郵稅 六錢

本田 増次 耶 譯述
婦人の修養 定價金 五拾錢 郵稅 六錢

文學士 皆川 正 譯述
淑女の美德 定價金 五拾錢 郵稅 六錢

四洞 六みの 譯者
偉人及婦人の感化 定價金 六拾錢 郵稅 六錢

内外出版協會 譯者
修養講話 定價金 一圓 拾錢 郵稅(小包) 八錢

人生問題叢書

井口丑二著 定價金壹拾五錢
 二宮 報德教要領極處世法 郵稅四錢
 井口丑二著 定價金貳拾錢
 尊德 報德物語 郵稅四錢
 榎本秋村譯述 及ルストイの教訓 郵稅四錢
 トルストイの自叙傳 郵稅四錢
 榎本秋村譯述 簡易生活の福音 郵稅四錢
 一名質素簡樸の修養 郵稅四錢

二、傳記書類

松本起編著 定價金壹圓廿錢
 三世傳 基 郵稅(小包)八錢
 大屋德城編著 定價金壹圓廿錢
 三世傳 釋 郵稅(小包)八錢
 西脇玉峯編著 定價金壹圓廿錢
 三世傳 孔 郵稅(小包)八錢

二宮翁傳

井口丑二著 定價金八拾錢
 郵稅(小包)八錢
 二宮 翁傳 郵稅(小包)八錢
 廣瀬勘次郎編著 定價金七拾錢
 リンコン 一代記 郵稅六錢
 コロンバス 定價金五拾錢
 博士ヘール原著 郵稅六錢
 波多野烏峰譯述 於けるルースウェルトの一週日 定價金拾五錢
 白館にルースウェルトの原著 郵稅四錢
 文士土著川正譯述 生涯 定價金五拾錢
 わが生涯 郵稅六錢
 チョクト原著 及ル其事の人物 定價金貳拾五錢
 山縣悌三郎譯述 渡邊修二郎編著 定價金貳拾五錢
 リンコンの事 郵稅四錢
 渡邊修二郎編著 義農作兵衛 定價金貳拾五錢
 佐倉木内惣五郎實錄 郵稅四錢
 義農作兵衛 定價金貳拾五錢
 松村巖崎彌太郎 定價金壹拾五錢
 郵稅不

現代名流自傳

新公論社編纂 定價金壹拾錢
 取井久其校著 明治崎人傳 郵稅不
 松村巖崎 勇 定價金貳拾五錢
 近藤 勇 郵稅不

三、偉人言行錄

時上賢造編著 定價金壹拾錢
 第一リンコン言行錄 郵稅四錢
 中里介山編著 定價金壹拾錢
 第二トルストイ言行錄 郵稅四錢
 中里介山編著 定價金壹拾錢
 第三ガリーホルド言行錄 郵稅四錢
 中里介山編著 定價金壹拾錢
 第四フランクリン言行錄 郵稅四錢
 時上賢造編著 定價金貳拾五錢
 第五アラウドストン言行錄 郵稅四錢
 中里介山編著 定價金壹拾錢
 第六二宮尊德言行錄 郵稅四錢

加藤信正編著

加藤信正編著 定價金壹拾錢
 第十ロイズェルト言行錄 郵稅四錢
 百島操編著 定價金壹拾錢
 第八ワシントン言行錄 郵稅四錢
 渡邊修二郎編著 定價金壹拾錢
 第九山鹿素行言行錄 郵稅四錢
 中里介山編著 定價金壹拾錢
 第十中江藤樹言行錄 郵稅四錢
 秋山悟庵編著 定價金壹拾錢
 第一貝原益軒言行錄 郵稅四錢
 松本起編著 定價金壹拾錢
 第十ルイラル言行錄 郵稅四錢
 渡邊修二郎編著 定價金壹拾錢
 第十大石良雄言行錄 郵稅四錢
 秋山悟庵編著 定價金貳拾五錢
 第四聖德太子言行錄 郵稅四錢
 五十嵐越郎編著 定價金壹拾錢
 第五吉田松陰言行錄 郵稅四錢
 渡邊修二郎編著 定價金壹拾錢
 第六波邊華山言行錄 郵稅四錢

本田無外編著	第十熊澤蕃山言行錄	定價金參拾錢
波邊修二郎編著	第八新井白石言行錄	定價金四拾錢
文學士藤吉喜一編著	第九ナホレオン言行錄	定價金參拾錢
松本越編著	第十ネルソン言行錄	定價金參拾錢
室田有編著	第十一ウエリントン言行錄	定價金參拾錢
大屋健城編著	第十二日蓮上人言行錄	定價金參拾錢
田中豐松編著	第十三ベスタロッチ言行錄	定價金參拾錢
百島操編著	第十四ゴッルドン言行錄	定價金參拾錢
四編ゴッルドン言行錄	定價金參拾錢	
姉齒準平編著	第十五ヴィンクストン言行錄	定價金參拾錢
榎不二夫編著	第十六伊藤仁齋言行錄	定價金貳拾五錢

本田無外編著	第七道元禪師言行錄	定價金參拾錢
河面仙四郎編著	第八クロムウエル言行錄	定價金參拾錢
四編玉峯編著	第九諸葛孔明言行錄	定價金參拾錢
松原至文編著	第十親鸞聖人言行錄	定價金貳拾五錢
大屋健城編著	第十一弘法大師言行錄	定價金參拾錢
波邊修二郎編著	第十二德川光圀言行錄	定價金參拾錢
廣瀬勸次郎編著	第十三フーベル言行錄	定價金參拾錢
三編フーベル言行錄	第十四山樞編著	定價金參拾錢
秋山樞編著	第十五林子平言行錄	定價金參拾錢
村田厚川編著	第十六佐久間象山言行錄	定價金參拾錢
北島竹之助編著	第十七司馬溫公言行錄	定價金貳拾五錢

本田無外編著	第七法然上人言行錄	定價金參拾錢
松原至文編著	第八西郷隆盛言行錄	定價金貳拾五錢
廣瀬勸次郎編著	第九ガリバルヂ言行錄	定價金參拾錢
松本越編著	第十マホメット言行錄	定價金參拾錢
丸島敬編著	第十一本居宜長言行錄	定價金參拾錢
一編本居宜長言行錄	第十二上杉鷹山言行錄	定價金參拾錢
秋山樞編著	第十三原三奇編著	定價金貳拾五錢
三編高野長英言行錄	第十四水環泉編著	定價金參拾錢
四編大鹽平八郎言行錄	第十五大屋健城編著	定價金參拾錢
大屋健城編著	第十六傳教大師言行錄	定價金參拾錢
田中豐松編著	第十七シザザ言行錄	定價金參拾錢

佐久間原編著	第七シニークスローア言行錄	定價金參拾錢
波邊芳雄編著	第八ラスキン言行錄	定價金參拾錢
武安園編著	第九孟子言行錄	定價金參拾錢
吉川潤二郎編著	第十ビスマルク言行錄	定價金參拾錢
丸島敬編著	第十一平田篤胤言行錄	定價金參拾錢
一編平田篤胤言行錄	第十二中豐松編著	定價金參拾錢
田中豐松編著	第十三エチソン言行錄	定價金參拾錢
本田無外編著	第十四白河樂翁言行錄	定價金參拾錢
三編白河樂翁言行錄	第十五福立吉編著	定價金貳拾五錢
高橋立吉編著	第十六福澤諭吉言行錄	定價金參拾錢
永代靜雄編著	第十七新島襄言行錄	定價金參拾錢
波邊修二郎編著	第十八大久保利通言行錄	定價金參拾錢

渡邊芳雄編著
 第七編 王陽明言行錄 定價金參拾四錢
 第八編 山崎闇齋言行錄 定價金貳拾五錢
 第九編 藤田東湖言行錄 定價金貳拾五錢
 第十編 賴山陽言行錄 定價金貳拾五錢
 第十一編 山陽言行錄 定價金貳拾五錢
 四。家庭書類 附婦女及少年書類
 博士フアラ一原著
 博士澤亮譯述
 家庭二三 定價金壹圓
 家庭に於ける職分 定價金五拾六錢
 家庭の新風味 定價金壹圓
 家庭夜話 定價金壹圓

ラフネー一原著
 家庭講話 定價金五拾六錢
 家庭主婦日記 定價金參拾五錢
 家庭理想の母 定價金貳拾五錢
 日本女性鑑 定價金四拾錢
 家庭小話 定價金貳拾五錢
 如何で生活すべ 定價金五拾六錢
 如何家庭計を整理すべ 定價金參拾五錢

羽仁もと子編
 家庭問題 定價金參拾五錢
 家庭教育の實驗 定價金參拾五錢
 育兒の法 定價金六拾八錢
 育兒の樂 定價金拾五錢
 黒馬物語 定價金五拾六錢
 はなしの仙郷 定價金貳拾二錢
 波多野鳥峰譯
 家庭愛の力 定價金貳拾二錢
 井口五二著
 謠曲御伽噺 定價金貳拾五錢
 少年園編纂
 こゝろ 定價金貳拾四錢
 朝夷孤舟編
 ちゑのくらも 定價金貳拾五錢

成澤金兵衛編
 家庭遊戯全書 定價金參拾四錢
 新國旗合せ 定價金貳拾二錢
 案外出版協會考案
 加藤眠柳譯述
 英國士道物語 定價金參拾五錢
 大屋徳城編著
 俗佛典物語 定價金參拾四錢
 ウィルヘルム・ハッパ
 フランダーズの犬 定價金貳拾五錢
 原著 日野麻村譯
 幽霊船 定價金貳拾五錢
 逸見士峯譯補
 アラビア夜話 定價金參拾四錢
 百島冷泉譯編
 天路歷程 定價金貳拾二錢

百島冷泉譯編 第二編	百島冷泉譯編 第三編	百島冷泉譯編 第四編	百島冷泉譯編 第五編	百島冷泉譯編 第六編	百島冷泉譯編 第七編	百島冷泉譯編 第八編	博士マリアン原著 文學士 竹村修譯述 實業に就する
奴隸トム	聖書物語	赤靴物語	二人巡禮	漂流記	イソップ物語	シエクスピア物語	青年
定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾錢 郵稅四錢	定價金貳拾錢 郵稅四錢	定價金貳拾錢 郵稅四錢	定價金壹圓 郵稅(小包)八錢

五。實業書類 附成功書類

廣瀨又一郎 實業家寶訓	本村原著 實業訓	コッパ 實業訓	文學士 竹村修譯述 商業の模範的經營	博士マリアン原著 成功の基礎	博士マリアン原著 成功の論	博士マリアン原著 成功の福音	博士マリアン原著 成功の福音
實業家寶訓	實業訓	實業訓	商業の模範的經營	成功の基礎	成功の論	成功の福音	成功の福音
定價金壹圓 郵稅(小包)八錢	定價金四拾錢 郵稅四錢	定價金四拾錢 郵稅四錢	定價金六拾錢 郵稅六錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金五拾錢 郵稅四錢	定價金貳拾錢 郵稅四錢	定價金貳拾錢 郵稅四錢

マリアン原著 松岡正男譯述 失敗の成功	高濱虛子著 俳句入門	寒川鼠骨著 歲事記例句選	佐藤紅綠著 俳句小史	山田三子編 燕村俳句全集	大塚甲山編 一茶俳句全集	熊谷無淵編 天明俳句集	河俣雪峰編 純日名家句集	大本源編 明治新俳句集
失敗の成功	俳句入門	歲事記例句選	俳句小史	燕村俳句全集	一茶俳句全集	天明俳句集	純日名家句集	明治新俳句集
定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金五拾錢 郵稅四錢	定價金四拾錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢

六。俳諧書類 附川柳狂歌書類

渡邊水巴 新俳句選	高柴外郎 俳句語彙	大塚甲山 芭蕉俳句全集	熊谷無淵 許六俳句集	佐藤紅綠 滑稽俳句集	文學士 沼波環音編 俳諧奇調集	古波禮音共編 古今名流俳句談	宮垣四海編著 俳人鬼貫附鬼貫句集	故三宅嶺山選並評 俳句類纂	花岡百樹編 川柳類纂
新俳句選	俳句語彙	芭蕉俳句全集	許六俳句集	滑稽俳句集	俳諧奇調集	古今名流俳句談	俳人鬼貫附鬼貫句集	俳句類纂	川柳類纂
定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾錢 郵稅二錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金拾貳錢 郵稅二錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金參拾錢 郵稅四錢	定價金貳拾九錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	定價金貳拾五錢 郵稅四錢

波樂齋編 川柳名句選 定價金貳拾錢
 波樂齋編 類題狂歌大全 定價金參拾錢
 高橋太華編 新柳樽 定價金貳拾錢
 東京外國語學校教授 片山寛著 英語の手紙 定價金貳拾五錢
 波邊修二郎著 英語獨案内 定價金四拾錢
 波邊修二郎著 英和日用會話 定價金四拾錢
 波邊修二郎著 英和書翰文例 定價金四拾錢
 波邊修二郎著 英語作文便覽 定價金五拾錢
 波邊修二郎著 英語會話 定價金參拾錢
 波邊修二郎著 實用英語會話 定價金參拾錢

七。語學書類

工學士山縣愷介著 英語自修論 定價金貳拾錢
 山縣五十雄著 英文學研究 定價金壹拾錢
 高等師範學校教授 本田増次郎註釋 英文詳解 定價金參拾錢
 波邊修二郎著 獨逸語獨案内 定價金五拾錢
 サイノブイノス JAPAN, 1883, 1884 (英文開國史談) 定價金五拾錢
 波邊修二郎校註 開國史談 (別冊英) 定價金四拾錢
 サイノブイノス HISTORY OF JAPAN (英文日本近世史略) 定價金五拾錢
 高等師範學校教授 本田増次郎註解 英雄論詳解 定價金貳拾五錢
 カイラ 英語論詳解 定價金貳拾錢
 文士皆川正壽註 希臘勇士譚 定價金參拾錢

文士皆川正壽註 英米名家詩抄 定價金六拾錢
 若松賤子譯 セーラクル物語 定價金參拾錢
 内村鑑三編 英和偉人と讀書 定價金貳拾錢

八。文學書類

ワグネル原著 文學士皆川正壽譯述 ヲグネル物語 定價金六拾錢
 ツルゲネーフ原作 相馬御風譯述 その前夜 定價金七拾錢
 佐々木邦邦譯 法螺男爵旅土産 定價金貳拾錢
 佐々木邦邦譯 ドン・キホーテ物語 定價金四拾錢
 佐々木邦邦譯 いたづら小僧日記 定價金四拾錢

佐々木邦邦譯 おてんば娘日記 定價金參拾錢
 山田美紗原著 血の涙 定價金參拾錢
 吉江孤雁譯 ツルゲーネフ短篇集 定價金五拾錢
 百島冷泉譯 トルスツイ小説集 定價金四拾錢
 百島冷泉譯 トルスツイ短篇集 定價金參拾錢
 ヒル原著 少女の操 定價金四拾錢
 宮地竹峰譯 短篇小説集 定價金四拾錢
 河井醉者編 新體青海波 定價金五拾錢
 詩集 青海波 定價金四拾錢
 宮崎三味編 中學文範 定價金五拾錢

寒川鼠骨編著 寫生文 定價金四拾錢	寒川鼠骨編著 日記文 定價金四拾錢	一貫文 普文 定價金貳拾五錢	山田美妙著 文例 定價金五拾錢	五十嵐越郎編 女子文範 定價金參拾五錢	九。中等教科書類(文部省檢定書)	文學士佐々政一編 日本文學史要 定價金五拾錢	文學士林森太郎編 國語讀本 定價金五拾錢	文學士原男六著 簡易西洋史 定價金七拾錢
-------------------------	-------------------------	----------------------	-----------------------	---------------------------	------------------	------------------------------	----------------------------	----------------------------

一〇。雜書(井に前掲の分類)

宮崎湖處子編 朗吟集 定價金五拾錢	宮崎湖處子編 續朗吟集 定價金貳拾五錢	文學士生田弘治譯 讀書の趣味 定價金八拾錢	若宮卯之助譯 東洋文明論 定價金四拾錢	米國大統領タフト原著 經國策 定價金四拾錢	內外出版協會編 袖珍百科全書 定價金壹圓	工學士後藤一郎著 寫真術全書 定價金五拾錢	波邊修二郎著 自轉車全書 定價金參拾錢
-------------------------	---------------------------	-----------------------------	---------------------------	-----------------------------	----------------------------	-----------------------------	---------------------------

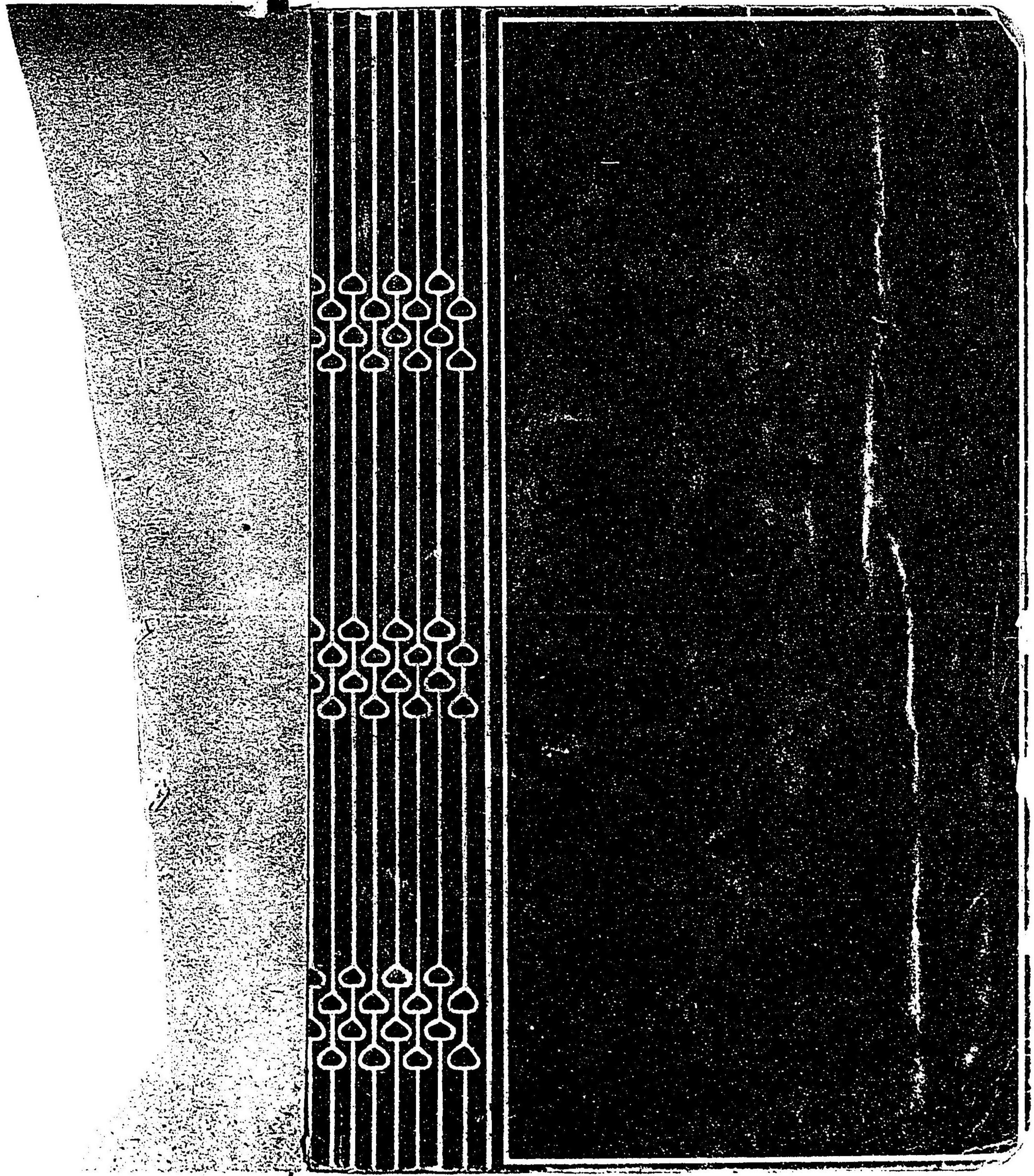
關根歌麿著 演劇大全 定價金六拾錢	渡邊修二郎著 各國分類年表 定價金八拾錢	千河岸櫻所著 日本武士氣質 定價金四拾五錢	篠田鐵造著 幕末百話 定價金四拾錢	渡邊修二郎著 必携百科節用 定價金貳拾錢	澁江保壽編 心象及び其の實驗 定價金四拾錢	新井龍峯纂譯 讀顏術一名西洋觀相術 定價金七拾錢	工學士市川紀元二著 應用骨相學 定價金參拾錢	瀧澤彦太郎著 養蠶新書 定價金參拾錢
-------------------------	----------------------------	-----------------------------	-------------------------	----------------------------	-----------------------------	--------------------------------	------------------------------	--------------------------

高橋田部平編著 全國學校案内 定價金五拾錢	長澤則彦著 模範自治村 定價金參拾五錢	內外出版協會案 明治四十二年反省日錄 定價金四拾錢	內外出版協會案 讀書餘錄 定價金四拾錢	文學士皆川正譯譯述 良人の選定 定價金參拾五錢	醫學士田村貞治譯 衛生美容術 定價金五拾錢	伊國カフ原著 西洋獨占 定價金貳拾五錢	內外出版協會編 就業自活案内 定價金參拾錢	內外出版協會編 女子の新職業 定價金參拾錢
-----------------------------	---------------------------	---------------------------------	---------------------------	-------------------------------	-----------------------------	---------------------------	-----------------------------	-----------------------------

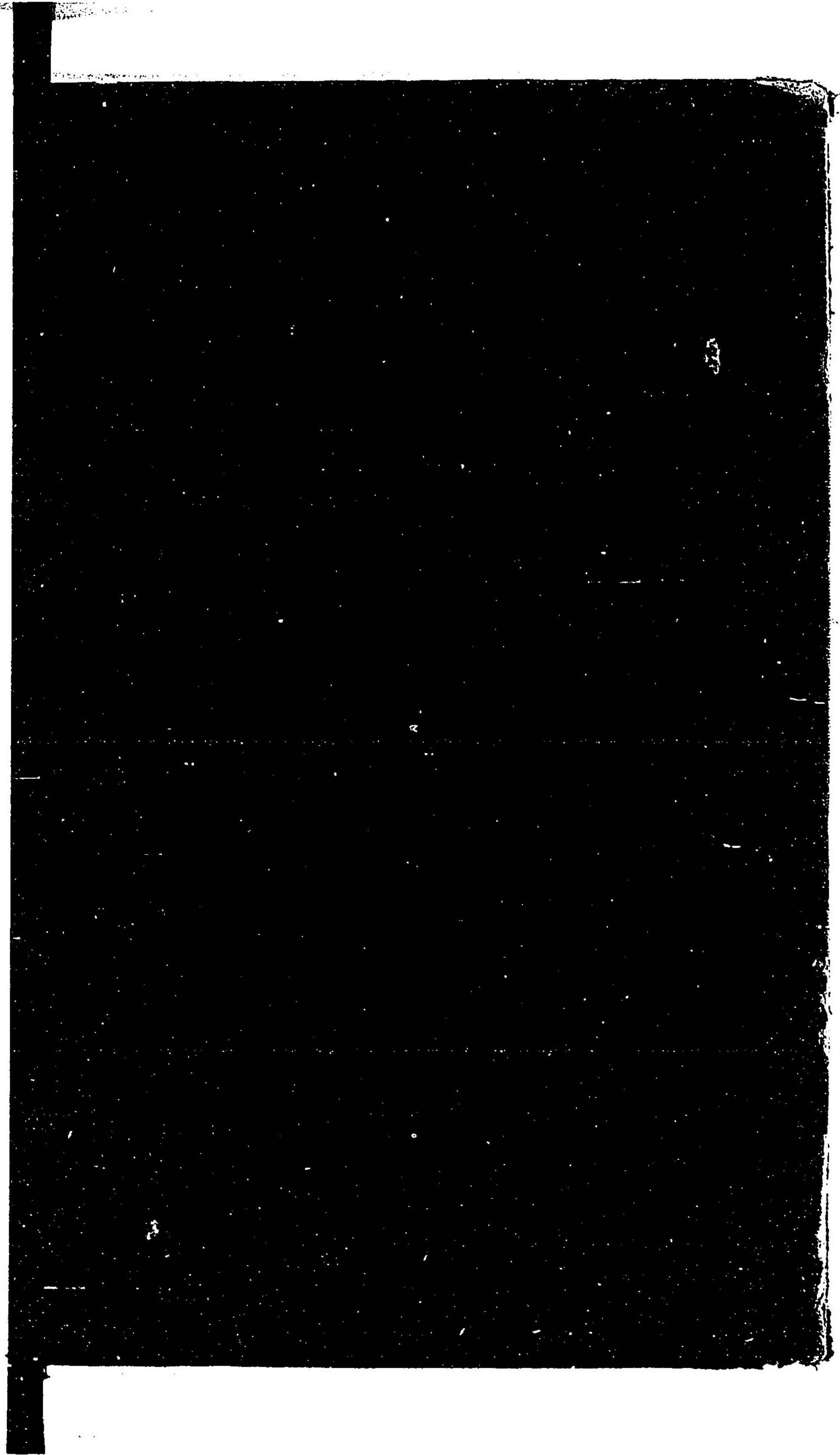
32
430

平木白星著 日本國歌(新體詩集) 郵定價金參拾錢	好本督譯述 教育上の常識 郵定價金貳拾五錢	久津見歐村著 立志小觀 郵定價金拾貳錢	落合源雄譯述 婦女小訓 郵定價金貳拾錢	加藤眠柳編著 女子立志編 郵定價金參拾錢	吉川曾水著 チエンパール 郵定價金貳拾錢	山田美妙著 アキナルド 郵定價金五拾錢	マリアン原著 桑田常蔵譯 儉約のすゝめ 郵定價金貳拾錢	堺川著 川庭隨筆 郵定價金貳拾錢	川瀬元九郎著 家庭衛生 郵定價金參拾錢
--------------------------------	-----------------------------	---------------------------	---------------------------	----------------------------	----------------------------	---------------------------	--------------------------------------	------------------------	---------------------------

小島烏水著 旅行談 郵定價金貳拾錢	伊藤銀月著 最新東京繁昌記 郵定價金五拾錢	同 冷火熱花 郵定價金四拾錢	山田美妙著 御婦人殿下 郵定價金貳拾錢	海賀變曾著 初つとめ 郵定價金貳拾錢	國府原東著 鷗影記 郵定價金拾五錢	文學士杉敏介著 日本小語典 郵定價金參拾錢	尺秀三郎譯 出世の間道(木) 郵定價金貳拾錢	原抱一庵譯 ABC組合 郵定價金拾五錢	同 十一二健兒 郵定價金貳拾錢
-------------------------	-----------------------------	----------------------	---------------------------	--------------------------	-------------------------	-----------------------------	------------------------------	---------------------------	-----------------------



32
460



32

430

101422-000-6

32-430

ラセラス王子物語

ジョンソン/著

M42

DBY-0759



